

南串山町文化財調査報告書第3集

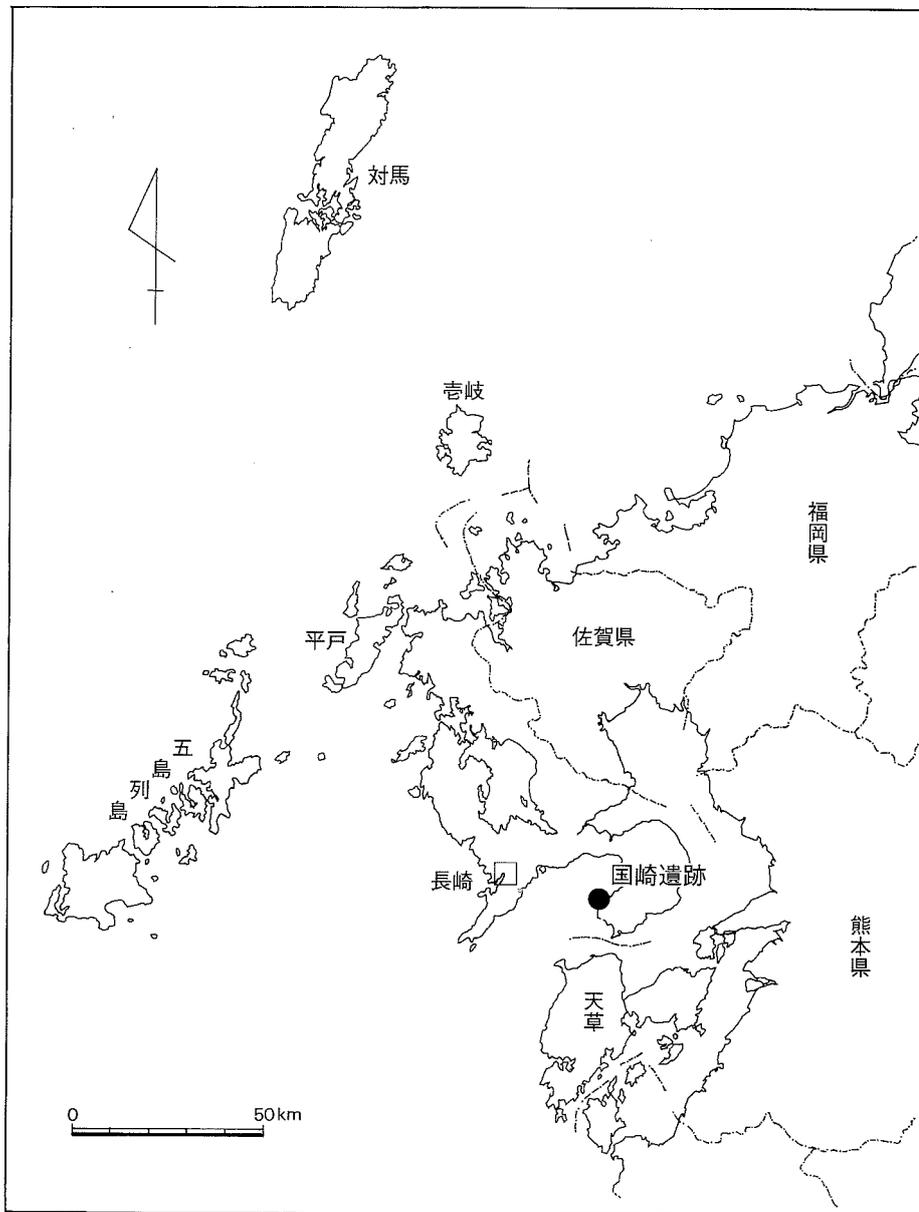
くに さき
園崎遺跡 II

1995

長崎県南串山町教育委員会

南串山町文化財調査報告書第3集

くに さき
国崎遺跡 II



発刊にあたって

このたび平成6年度実施いたしました南串山町国崎遺跡発掘調査の結果を報告書として発刊することになりました。国崎遺跡は、南串山町の西端、海岸に突きでた美しい国崎半島の砂礫丘に分布する遺跡であります。

この地には、ハマユウ、オニユリ、キョウチクトウなどが自生し、夏にはそれらの花が、咲き乱れる景勝地で県立自然公園に指定されている本町唯一の憩いの場でもあります。町でもこの国崎遺跡の発掘調査を行い遺跡の保存に努める一方、県立自然公園としての整備を図ってきておるところであります。今年度も県文化課の指導を受けながら発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文、弥生時代の土器類や奈良、平安時代の遺物や人骨などが沢山発掘されました。これらは、私どもの先人たちの面影を偲ぶ貴重な文化遺産であります。

「温故知新」—古きを尋ねて新しきを知る—この心で、今後南串山町の貴重な文化遺産としてこの地の保存と開発の調整を図っていきたいと思います。

最後に、今回の調査にあたり大変なご指導とご協力をいただきました県文化課の先生方、調査作業に従事いただきました地元関係者のみなさんに心から感謝を申し上げ発刊の挨拶といたします。

平成7年3月31日

南串山町教育長

加 藤 孝 明

例 言

1. 本書は、長崎県南高来郡南串山町丙1番地外に所在する国崎（くにさき）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国崎半島公園整備事業に伴い、平成6年12月5日から同年12月21日まで実施した。
3. 調査は、南串山町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が実施した。
4. 本書の執筆は、Vの3・4を寺田正剛がおこない、その他を古門雅高がおこなった。
5. 報告書の作成については、渡辺康行氏の協力を得た。
6. 獣骨の報告については大分市歴史資料館長 木村幾多郎氏の教示を得た。
7. 人骨については長崎大学医学部解剖学第二教室 分部哲秋氏より玉稿を賜った。
8. 製図は、斉藤いずみと寺田がおこなった。
9. 本書関係の写真撮影は、調査中のものは寺田・古門が担当し、遺物については古門がおこなった。
10. 本書関係の遺物は、報告書刊行後、南串山町教育委員会に移管される予定である。
11. 本書の編集は、古門による。

本文目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査の概要	4
1. 調査方法	4
2. 基本層位	4
IV. 遺物出土状況	6
1. 出土縄文土器接合状況ならびに出土石器	6
2. 第4 a層からの遺物出土状況	7
3. 第4層からの遺物出土状況	7
V. 出土遺物	8
1. 縄文土器	8
2. 石器	14
3. 弥生時代・古墳時代の土器	18
4. 奈良時代・平安時代の土器	18
5. 獣骨	24
VI. 総括	25
1. 縄文晩期前半の土器について	25
2. 縄文晩期前半における剥片剥離技術について	27
3. 国崎遺跡における礫石器について	28
VII. まとめ	29
VIII. 付編	49

挿図目次

第1図	国崎遺跡調査区配置図 (1/2000)	1
第2図	国崎遺跡と周辺の遺跡・地形 (1/25,000)	3
第3図	国崎遺跡調査区 (1/1000)	4
第4図	国崎遺跡土層図 (1/80)	5
第5図	C・D区出土縄文土器接合状況 (1/60)	6
第6図	第4 a層遺物出土状況 (土器1/24 石器1/16)	7
第7図	第4層遺物出土状況 (土器1/24, NO21・22は1/32, 石器1/16)	8
第8図	第4 a層出土縄文土器実測図① (1/3, NO 8 は S = 1/4)	9
第9図	第4層出土縄文土器実測図② (1/3)	11
第10図	第4層出土縄文土器実測図③ (1/4)	12
第11図	第4層出土縄文土器実測図④ (1/3)	13
第12図	剥片石器実測図① (2/3)	15
第13図	礫石器実測図① (1/3)	16
第14図	礫石器実測図② (1/4)	17
第15図	弥生時代・古墳時代の土器実測図 (1/3)	18
第16図	奈良～平安時代の遺物 (須恵器①) 実測図 (1/3)	19
第17図	奈良～平安時代の遺物 (須恵器②) 実測図 (1/3)	21
第18図	奈良～平安時代の遺物 (土師器・製塩土器など) 実測図 (1/3)	22
第19図	輸入陶磁器実測図 (1/3)	23

表 目 次

第 1 表	国崎遺跡出土奈良～平安時代出土遺物統計表……………	23
第 2 表	国崎遺跡出土獣骨一覧表……………	24

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景・近景……………	33
図版 2	土 層……………	34
図版 3	遺物出土状況……………	35
図版 4	縄文土器①……………	36
図版 5	縄文土器②……………	37
図版 6	縄文土器③……………	38
図版 7	縄文土器④……………	39
図版 8	須 恵 器①……………	40
図版 9	土師器・須恵器②……………	41
図版10	弥生土器・土師器・製塩土器・輸入陶磁器など……………	42
図版11	剥片石器……………	43
図版12	礫 石 器……………	44
図版13	獣 骨 ①……………	45
図版14	獣 骨 ②……………	46

I. 調査にいたる経緯

国崎遺跡は、昭和58(1983)年度の遺跡周知事業に伴う長崎県文化課（以下、県文化課）の分布調査によって発見され、縄文時代から中世にかけての遺跡として周知された。

昭和61(1986)年に、公園整備事業に係る休憩所の建設に伴い、南串山町教育委員会(以下、町教委)と県文化課が緊急発掘調査を実施したところ、奈良・平安時代の遺物が出土した(調査区は第1図)。

昭和63(1988)年には、県立自然公園整備計画に先立ち、町教委と県文化課で国庫補助事業による遺跡の範囲確認調査を実施し、平成元(1989)年3月に調査報告書を刊行した(調査区は第1図A~J)。

この調査の結果、国崎遺跡には、縄文時代中期・後期の包含層が礫丘南部に存在すること、その上を奈良・平安時代の遺物包含層が覆いながら、礫丘先端の住吉神社付近にまで及ぶことが確認された。

平成5(1993)年には、遺跡の西にある住吉神社の裏側に航路標識を設置するため、町教委と県文化課が範囲確認調査を実施したが、遺構・遺物の出土はなかった。

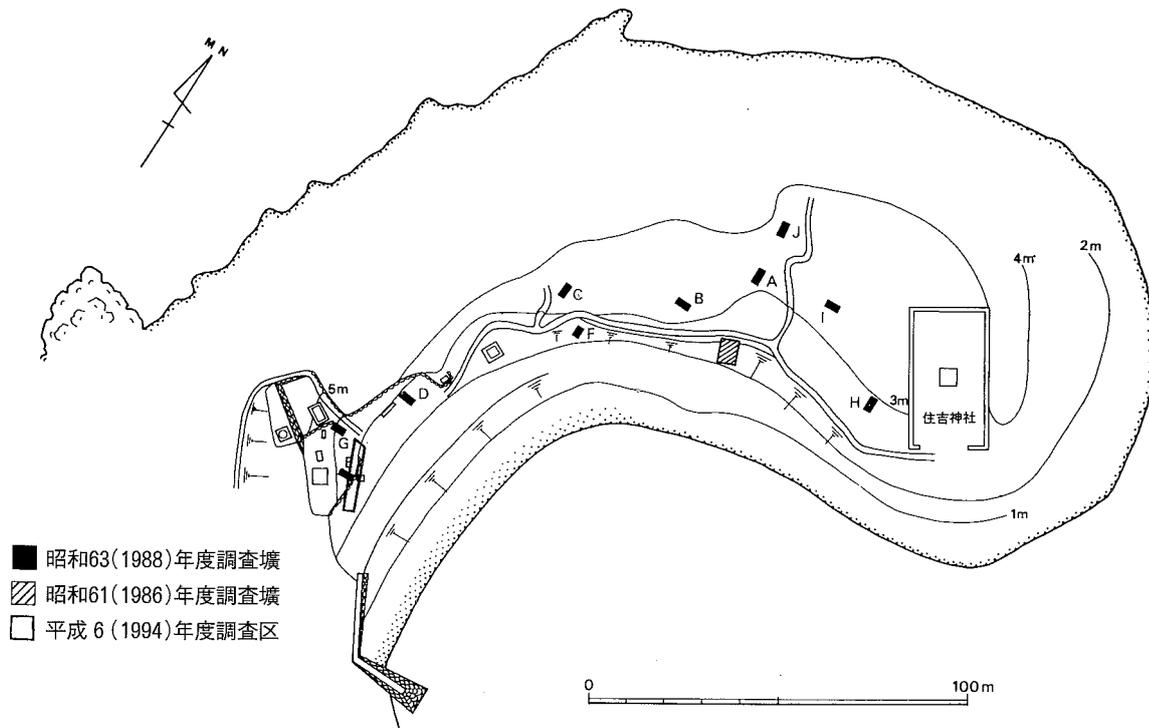
今回の調査は、国崎半島の公園整備に伴い、町教委が主体となり、県教委が実施した。調査組織は以下のとおりである。

南串山町教育長 加藤孝明

同 教育次長 森谷和一郎, 同 社会教育主事 富永修一,

長崎県文化課係長(副参事) 安楽勉

作業員 井上ヤスエ, 井上トナカ, 井上キヌエ, 井上ミサヲ, 井上イセ子, 徳永三枝子, 井上亘,
井上定枝, 井上数江, 井上映乃, 井上洋子, 竹下トミ子, 三輪文子, 井上等, 井上馨



第1図 国崎遺跡調査区配置図 (S=1/2000)

II. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

南串山町は長崎県南高来郡の西端に位置し、面積約15.22km²、人口5,297人（平成6年7月現在）を数える。町内は波状的な急傾斜地が多く、平坦地は沼田地区に22haを有するのみである。じゃがいもを中心とした畑作が盛んであり、天草などへも出作りをおこなっている。一方、海岸線は11.1kmと長く屈曲して変化に富み、京泊港などの良港に恵まれている。国崎遺跡は、橘湾に突き出した国崎半島先端に形成された砂嘴上に立地する。砂嘴は輝石安山岩からなる礫丘ともいべき景観で、南東の一部には砂浜を形成している。礫丘は住吉鼻とよばれ、長さ250m、幅100m、標高6mをはかり、先端部には海上守護の住吉神社がある。（小野・宮崎1989）

国崎半島は周囲約3kmの陸繋島で、橘湾を一望し、長崎半島・天草諸島をも視野にいれることができる。気候は温暖で、アコウ・ハマユウなどの亜熱帯植物が自生し、長崎県立島原半島自然公園の一部となっている（瀬野・外山1987）。

2. 歴史的環境

国崎遺跡の歴史的環境については、昭和63（1988）年調査時の報文（小野・宮崎1989）に詳しいので、ここではそれ以降、調査報告された橘湾沿岸の遺跡について概観しておく。町内遺跡については第2図に掲載した。

(1)築崎遺跡（藤田1989） 北高来郡飯盛町後田名字築崎に所在する、縄文時代前期から中世の遺跡である。遺跡は江の浦の干拓地に接する丘陵端部に立地しており、本来は貝塚を伴った遺跡と考えられている。性格が明らかな遺構は発見されていない。出土遺物として台形様石器・ナイフ形石器・石鏃・石銚・削器・磨製石斧・石錘・凹石・砥石・磨石・礫器・轟式土器・曾畑式土器・弥生土器・土師器・須恵器・須恵質土器・瓦器・陶磁器・石鍋・土錘・羽口・鉄さいが出土している。

(2)辻貝塚（村川ほか1991） 南高来郡加津佐町野田名辻1180に所在する。標高20～30mの丘陵上に位置する貝塚である。遺構としては、方形にめぐる溝・土壇などが出土している。遺物としては、弥生土器（後期）・同（終末）・大形管状土錘・礫器・凹石・磨石・敲石・石皿などがある。

(3)大門貝塚（藤田ほか1993） 北高来郡飯盛町里名の標高10mの砂礫丘上に立地する。1991（平成3）年に県文化課による重要遺跡範囲確認調査が行われた。遺構は確認できなかったが、出土遺物として鐘崎式土器・弥生土器（後期）・須恵器・土師器・土錘・磨製石斧・石匙・スクレイパー・敲石・礫器・骨角器などが出土している。

[引用・参考文献]

- 小野ゆかり・宮崎貴夫1989「国崎遺跡」南串山町文化財調査報告書第2集 南串山町教育委員会
瀬野精一郎・外山幹夫編1987『角川日本地名大辞典 42 長崎県』角川書店
藤田和裕1989「築崎遺跡」飯盛町文化財調査報告書第1集 飯盛町教育委員会
村川逸朗・安楽勉・寺田正剛1991「辻貝塚」加津佐町文化財調査報告書第1集 加津佐町教育委員会
藤田和裕・下田章吾1993「大門遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書I』長崎県文化財調査報告書 第109集 長崎県教育委員会



- | | | |
|----------|-----------|------------------|
| 1. 国崎遺跡 | 2. 国崎半島遺跡 | 3. 京泊禅寺跡 |
| 4. 上ヶ池遺跡 | 5. 城ノ越城跡 | 6. 奥田池脇遺跡 |
| 7. 溜水遺跡 | 8. 新山遺跡 | 9. 遠見塚遺跡 |
| 10. 城山城跡 | 11. 尾登禅寺跡 | 12. 門山遺跡 |
| 13. 串山城跡 | 14. 日原遺跡 | 15. 南串山町のキリシタン墓碑 |

第2図 国崎遺跡と周辺の遺跡・地形 (S=1/25,000)

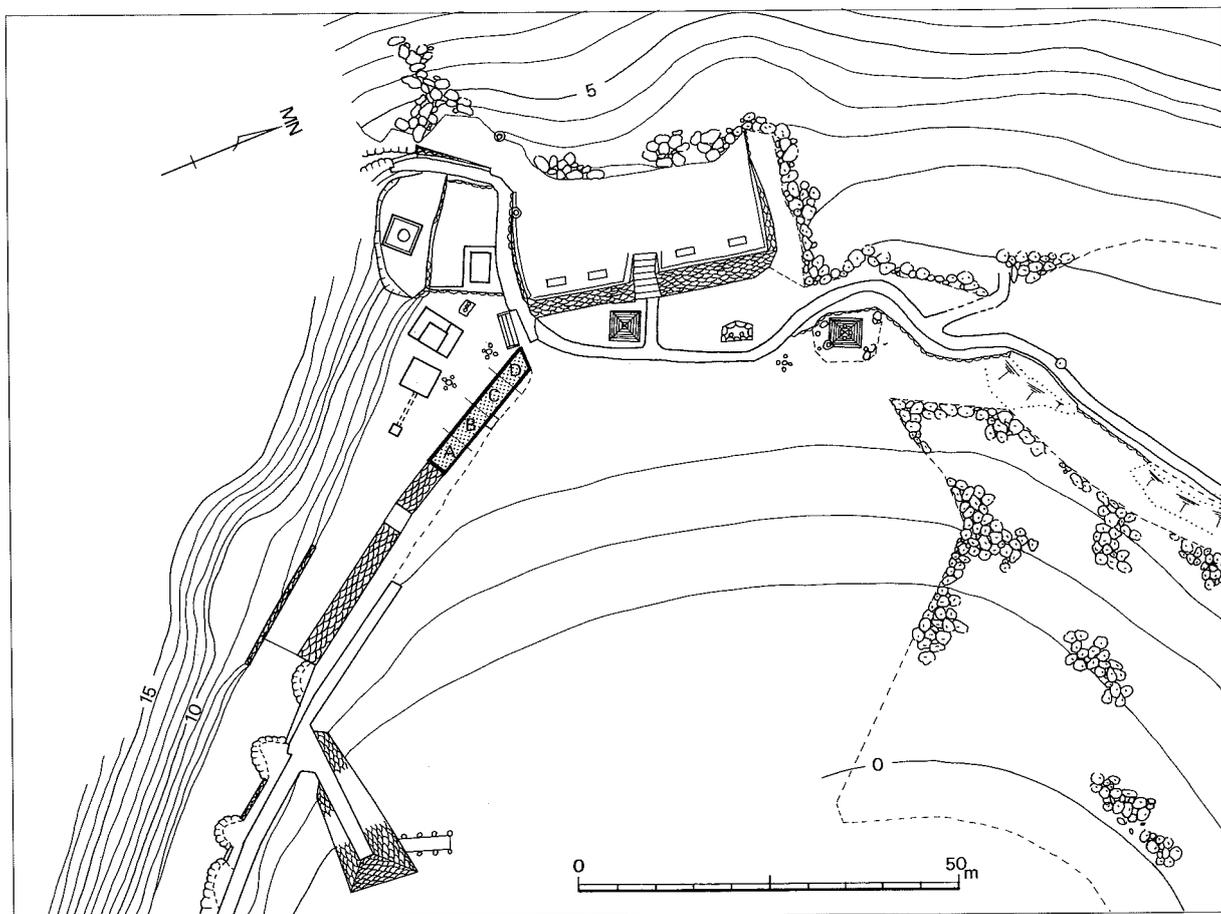
III. 調査の概要

1. 調査方法 (第3図)

調査は、本年度の公園整備事業対象地を連続した4つの調査区に分け、南からA・B・C・D区として実施した。1つの調査区は6m×4mとし、全体で6m×16mの矩形となるように設定した。

また、A・B区の間には、土層観察用のあぜを残した。

出土遺物は、C区とD区に集中した。両区の出土遺物は、第3層出土遺物まで同一層一括で取り上げたが、第4a層からは出土の原位置を1点ずつ記録した。



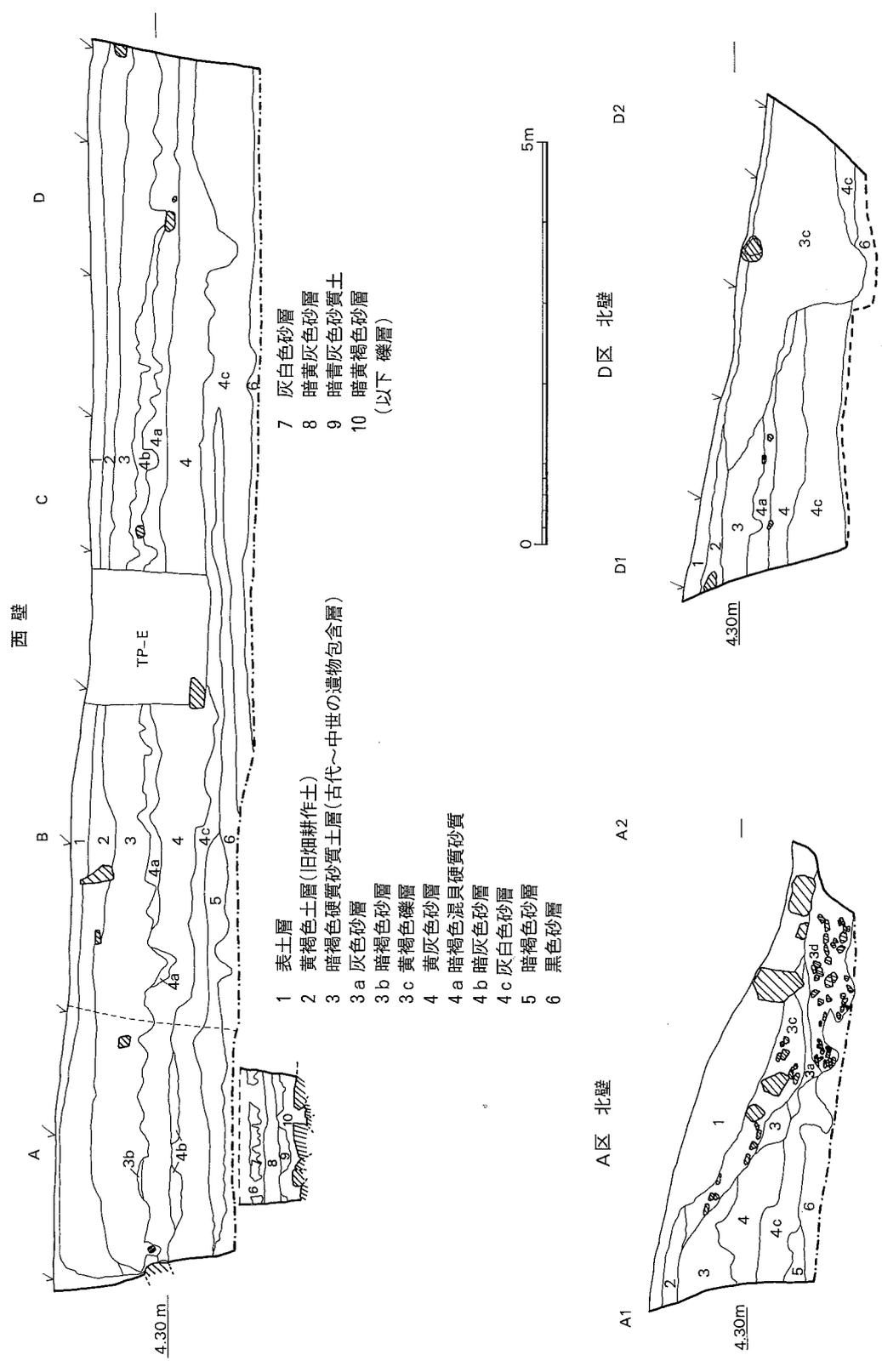
第3図 国崎遺跡調査区 (S=1/1000)

2. 基本層位 (第4図)

調査前の地形は、海岸に向かって傾斜する斜面で、以前は畑として利用されていた。

基本的な層序は、第1層、第2層が表土ならびに耕作土で、第3層(暗褐色硬質砂質土層)が古代から中世の遺物包含層である。第4a層(暗褐色混貝硬質砂層)と第4層(黄灰色砂層)は縄文晩期前半を中心とした遺物包含層である。

第3層は拳大の礫を多く含み、この礫中に遺物を包含していた。この第3層と第4a層や第4層の間は不整合をなすことから、第3層の堆積は、急流あるいは濁流などによる第4層の削り込みに始ま



第4図 国崎遺跡土層図 (S=1/80)

ると考える。大小の礫の集積もそれを傍証するものと思われる。

第4層以下は、漸移層であることから、この時期は砂の供給が安定しておこなわれていたことがわかる。

第6層は、黒色砂層であるため、この層の堆積時期は砂の供給が少なく、植物などが繁茂できる環境であったことが推測される。

第6層以下の層序は、A区にサブトレンチを設定して観察した。第8層は、第6層に比べて粒子が細かい暗黄灰色砂層で、さらに粒子が細かい第10層（暗黄褐色砂層）となり礫層にいたる。

東西方向の土層の観察によって、縄文晩期の包含層である第4a層や第4層は調査区の東側半分では失われており、旧地形は現在より傾斜の強い斜面であったことがわかった。第3層堆積後に流れ込んだ第3c層などによって、現在のような緩斜面が形成されたとみられる。

IV. 遺物出土状況

1. 出土縄文土器接合状況（第5図）ならびに出土石器

C・D区の第4a層ならびに第4層より出土した縄文土器のうち、原位置を記録した土器がC区で

154点、D区で229点、合計383

点あった。第5図は、それら

の接合関係を示したものである。

出土土器383点のうち接合

関係にあった土器は125点、37

例あった。破片2点による接

合が19例、3点による接合が

8例、4点以上の破片による

接合は10例あった。1例を除

き、水平距離65cm以内、垂直

深度25cm以内の範囲に分布し

ている。また、異なる土層間

で接合した例も極めて少なく、

整層的な土層の堆積から考え

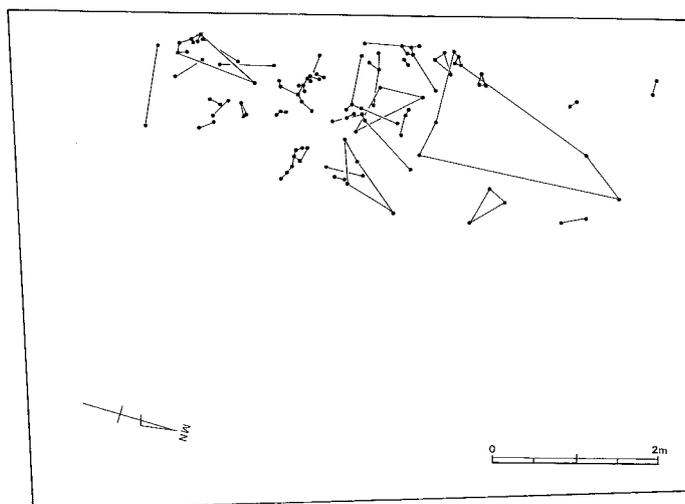
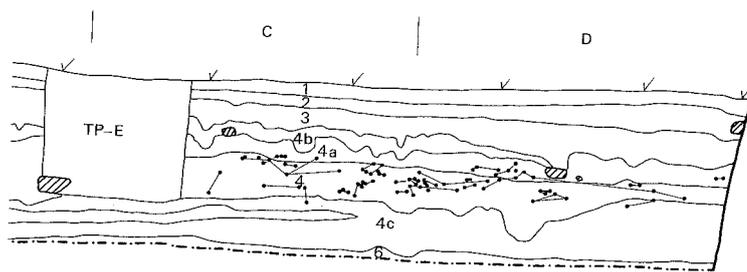
ても第4a層と第4層から出

土した縄文土器は原位置を

保っていると考えられる。

C・D区第4a層ならびに

第4層から出土した石器は剝

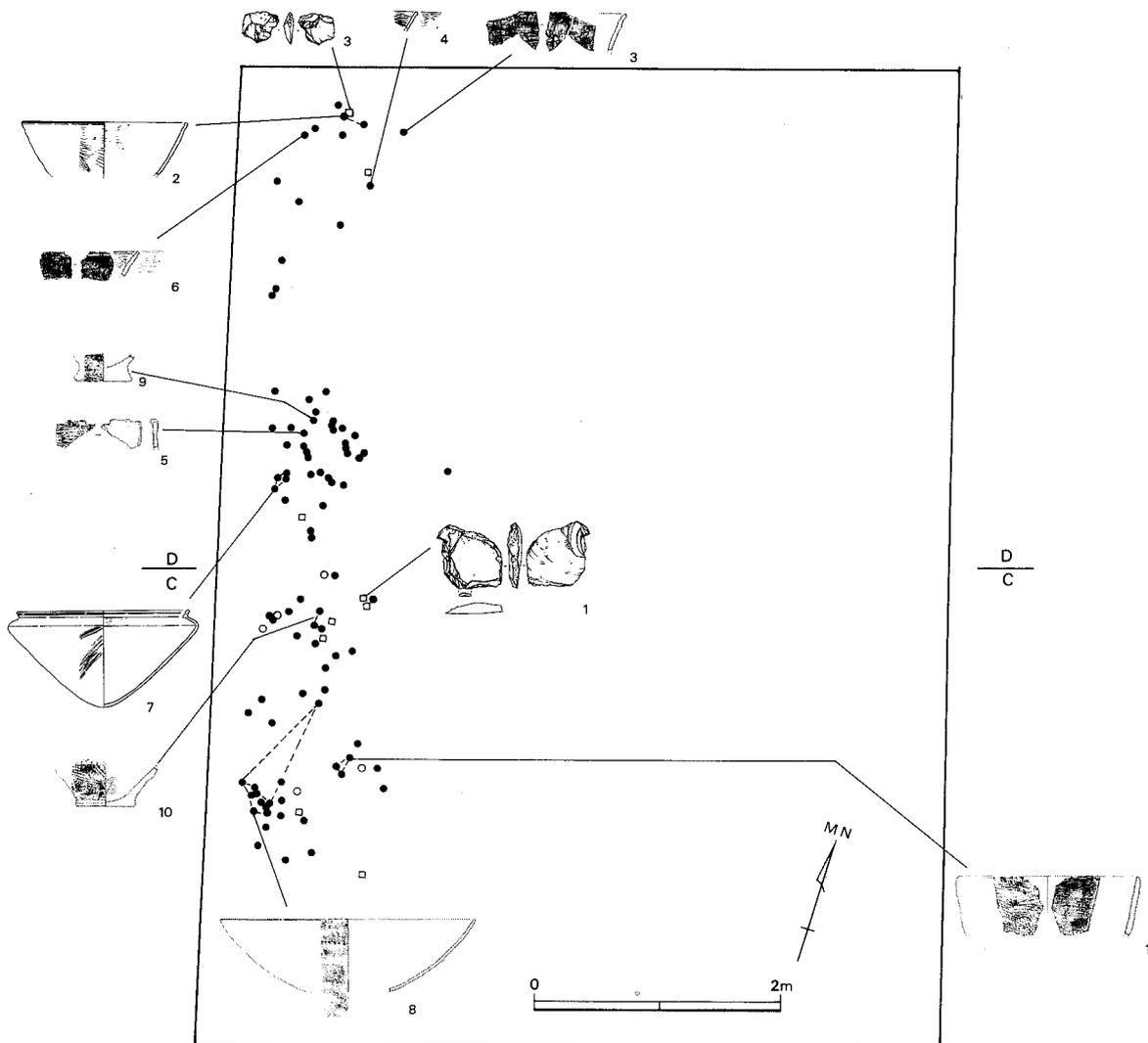


第5図 C・D区出土縄文土器接合状況 (S=1/60)

片や礫石器など、C区で23点、D地区で16点の合計39点であった。

2. 第4 a層からの遺物出土状況 (第6図)

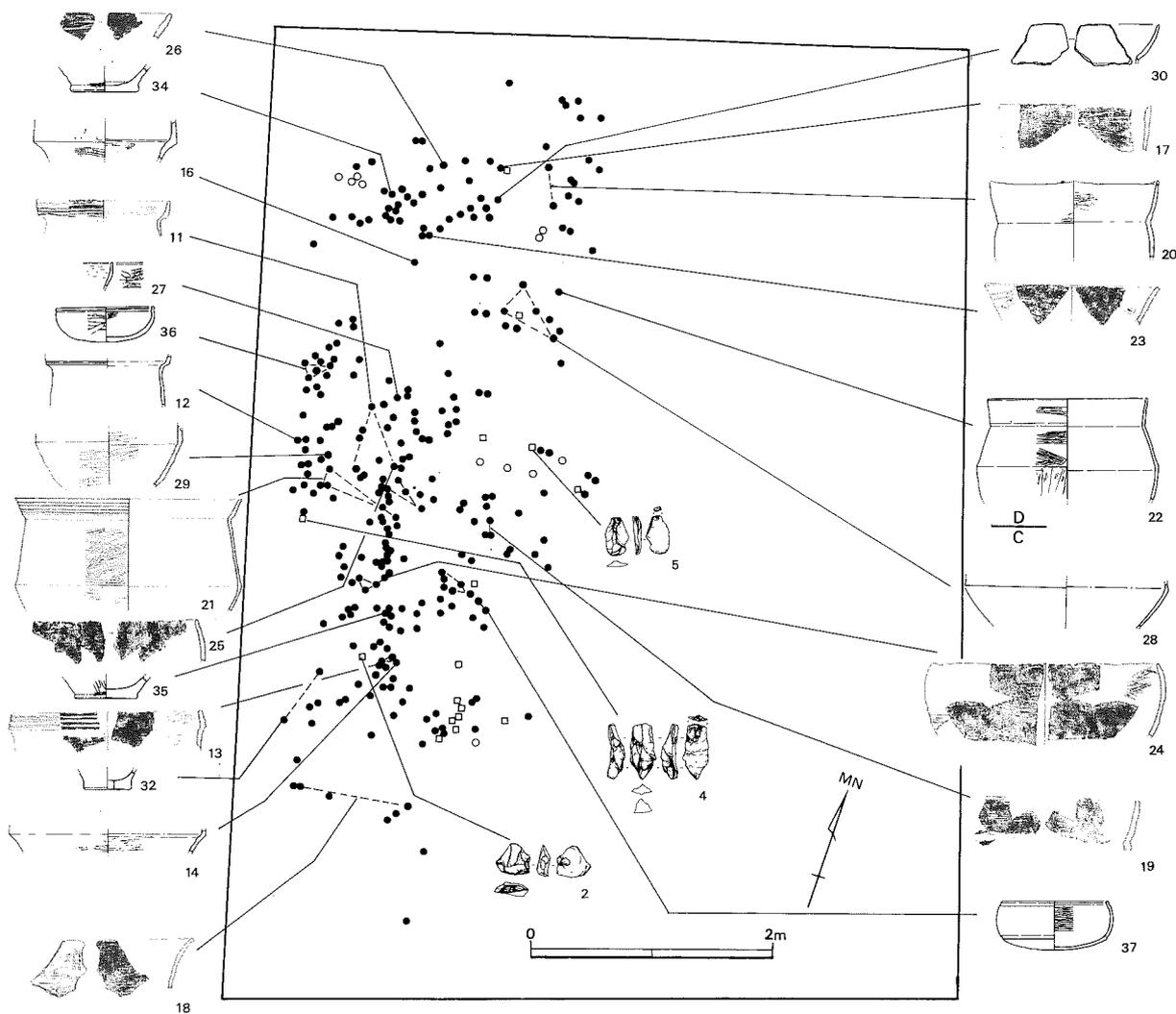
C・D区の第4 a層からの遺物出土状況を第6図に示した。調査区の東半分は、包含層が存在せず縄文時代の遺物の出土はみなかった。同層は貝層で、今回の調査ではこの貝層の東端をとらえたことになる。貝層は、調査区のさらに北西にのびていると予想され、貝塚としてのこっている可能性も考えられる。第4 a層から出土した土器は、C区から44点、D区から56点の合計100点であった。石器は、それぞれ8点と7点の合計15点であった。



第6図 第4 a層遺物出土状況 (S = 土器1/24 石器1/16)

3. 第4層からの遺物出土状況 (第7図)

C・D区の第4層からの遺物出土状況を第7図に示した。調査区の東半分には包含層が存在しないことは、前述のとおりである。第4層から出土した土器はC区から110点、D区から173点の合計283点であった。出土した石器は、それぞれ15点と9点の合計24点であった。



第7図 第4層遺物出土状況 (S = 土器1/24, NO21・22は1/32, 石器1/16)

V. 出土遺物

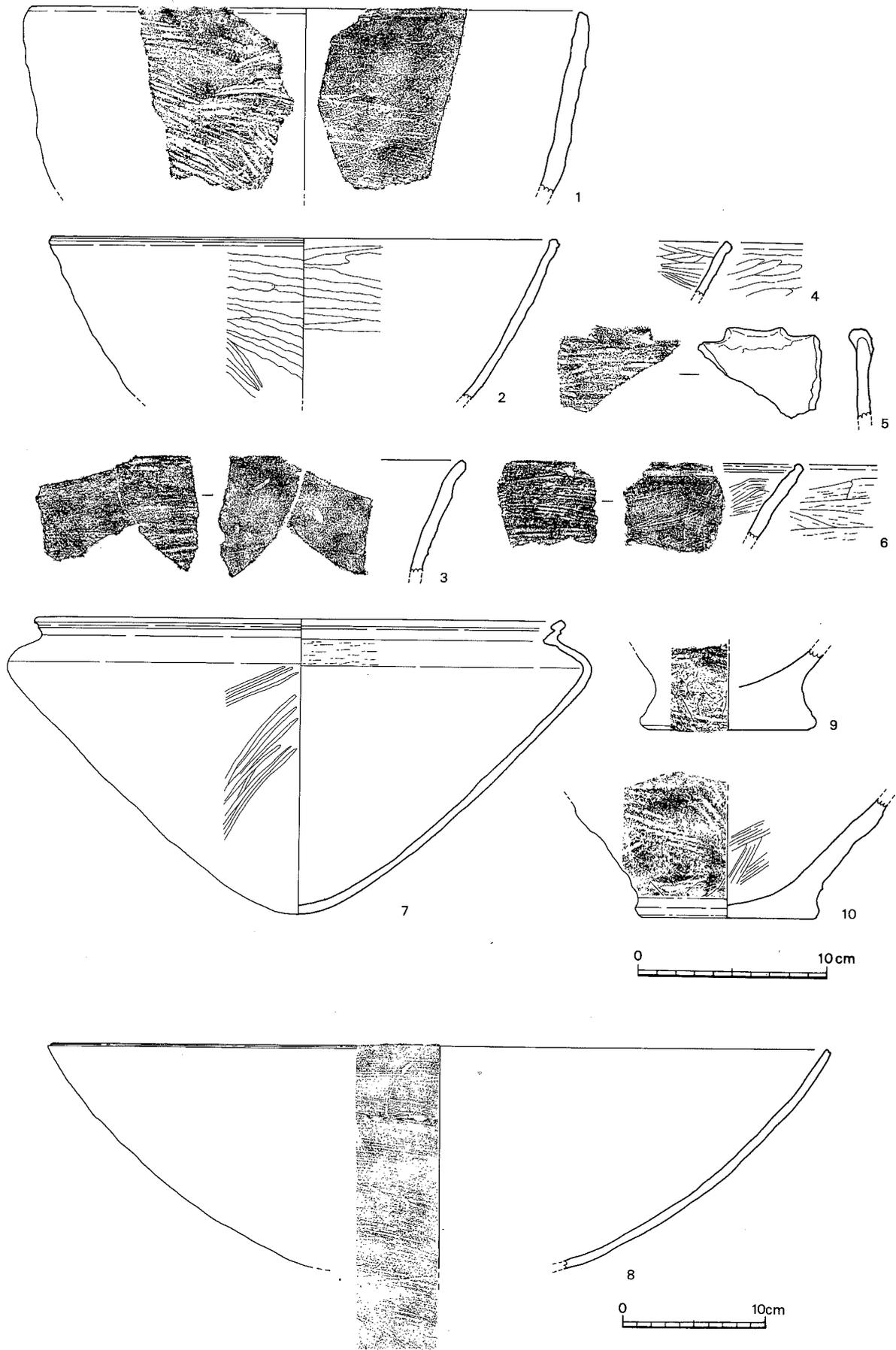
1. 縄文土器

今回出土した土器を以下のように分類し、個々の土器について詳述する。

深鉢形土器は、A類(直口縁で口縁部が外方にひらくもの)、B類(タガ状口縁をもつもの)、C類(「く」字状口縁をもつもの)に形式を分類し、同様に浅鉢形土器はA類(直口縁で口縁部が外方にひらくもの)、B類(口縁部が内湾するもの)、C類(口頸部が短く立ち上がり肩部に最大径をもつもの)に分ける。その他の器形として、椀(マリ)形土器、鉢(皿)形土器に分ける。

(1) 第4a層出土土器(第8図, 図版4・5)

深鉢A類(1・3)口縁部が直行して外方にひらく深鉢形土器である。1は粗製深鉢である。口唇部は外面に向かって面取りをおこなったようになっている。外面には2枚貝の腹縁による条痕が残る。内面も条痕が残るが、ほとんどナデ消している。3も粗製の深鉢で、内外面に条痕を残すが、内面は



第8図 第4a層出土縄文土器実測図① (S=1/3, No.8はS=1/4)

ナデ消されている。

浅鉢A類(2・4) 黒褐色の精製浅鉢形土器で、同一個体の可能性がある。内外面はよく研磨され、とくに内面は研磨のあと平滑にナデられている。口唇部の外面は肥厚させている。

浅鉢B類(6) 茶褐色の粗製浅鉢形土器である。内外面に板状工具による擦過痕を残す。口唇部内面に浅い沈線を一条めぐらす。

浅鉢C類(7) 灰褐色の精製浅鉢形土器である。尖底で肩部に最大径がくるといふ特異な器形をもつ。口縁部は玉縁状に成形され、外面に沈線、内面は沈線状の段をもつ。内外面はよく研磨されており、肩部内面にはケズリがおこなわれている。底部外面には使用にともなう磨滅がみられ、この土器が床に据えられて使用されたことは明らかだが、どのようにして安定を保ったのかが疑問である。

鉢(皿)形土器(8) 黒褐色で復元口径50cmの大型の粗製鉢形土器である。外面は二枚貝腹縁による条痕が残り、胴部から口縁部にかけては細い沈線状の擦過を施している。内面は丁寧にナデている。

リボン状突起(5) 波状口縁の口唇部に貼りつけられている。土器は黒褐色で外面は二枚貝の腹縁による条痕で調整し、内面は丁寧にナデられている。

底部(9・10) いずれも粗製の平底の底部である。外面には貝殻腹縁による粗い条痕が残り、10では内面にまで及ぶ。

(2) 第4層出土土器(第9・10・11図、図版5・6・7)

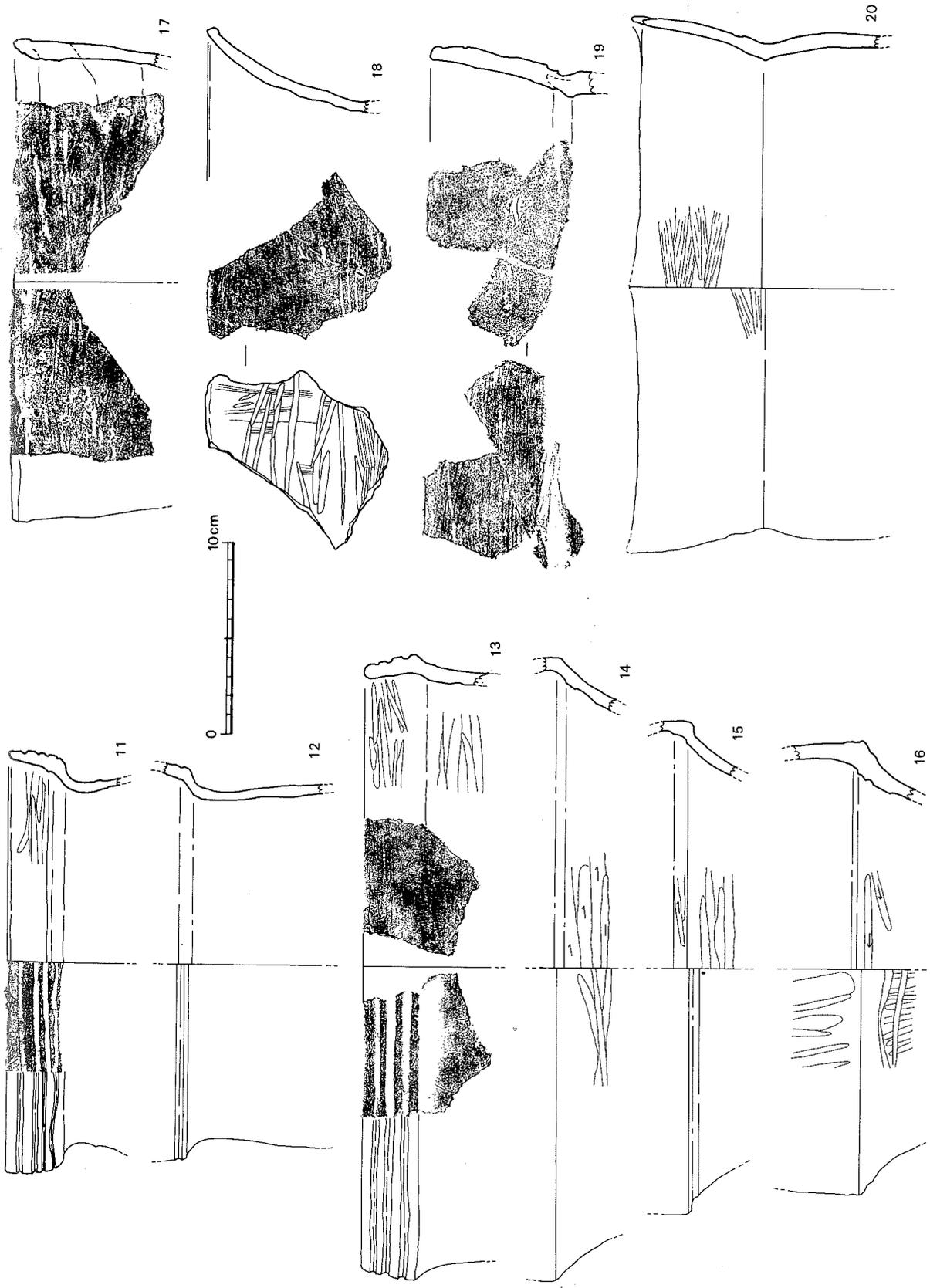
深鉢A類(17・18) いずれも粗製の直口縁の深鉢である。17は灰色で内外面に板状工具による雑な条痕がのこる。口縁部は、きわめて低い波状をなし、胎土には多量の貝粉が混入している。18は粗製だが内外面はよく研磨されており、半精製品といつてよい。

深鉢B類(11~16) いずれもタガ状口縁をもつ褐色の深鉢形土器である。文様帯に数条の沈線をめぐらすもの(B-1類)(11~13)と沈線をもたないもの(B-2類)(14~16)がある。11は文様帯に断面V字状の4本の沈線がめぐり、内外面は研磨されている。12は文様帯が欠損しているので沈線が何条あるかは確認できないが、内外面はよく研磨されている。13は口縁部が内傾し、文様帯に3条の沈線がまわる。内外面はよく研磨されている。14~16は茶褐色の粗製深鉢で、外面は研磨されている。15は内外面ともに研磨された半精製品である。

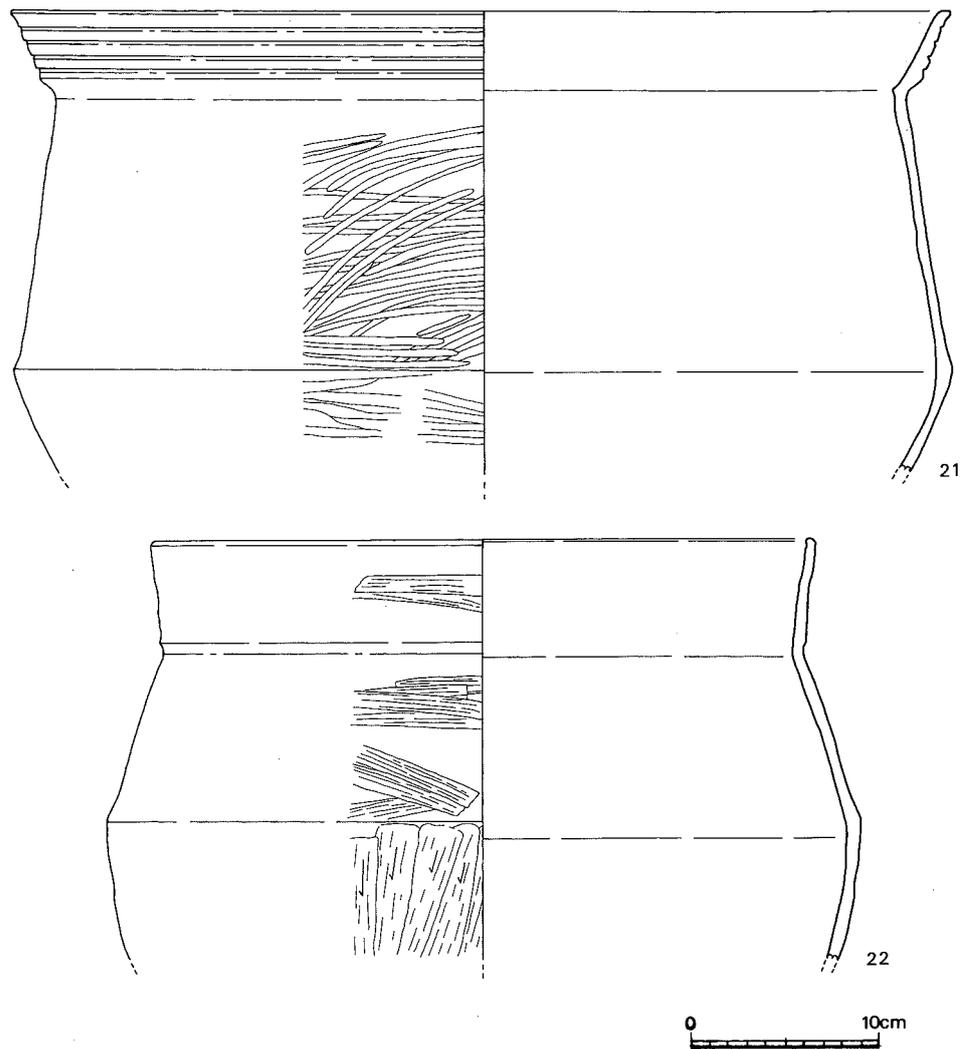
深鉢C類(19~22) 口縁部に沈線をまわすもの(21)と無文のものがある。19は黒灰色の粗製深鉢形土器で、口縁部に板状工具で整形したあと、棒状工具で表面を搔いている。20も黒灰色の粗製深鉢形土器で、口縁部は低い波状をなす。内外面は最終的にナデにより平滑に仕上げている。21は茶褐色の粗製深鉢形土器で口縁部に4本の沈線をめぐらしている。外面を丁寧に研磨し、内面はナデ調整をおこなっている。22は褐色の粗製深鉢形土器で、外面の胴部上半は横位の条痕、胴部下半は縦位の条痕で調整し、内面はナデている。

浅鉢A類(23・26) 23は粗製で口唇部を平坦に成形し研磨状のナデを行っている。内外面は板状工具による擦過痕がある。26は内外面に板状工具の擦過痕を残し、特に外面の条痕は粗い。

浅鉢B類(24・25・27) 24は粗製の浅鉢で、口縁部はA類に比べ丸みをもつ。外面には粗い擦過を



第9図 第4層出土縄文土器実測図② (S=1/3)



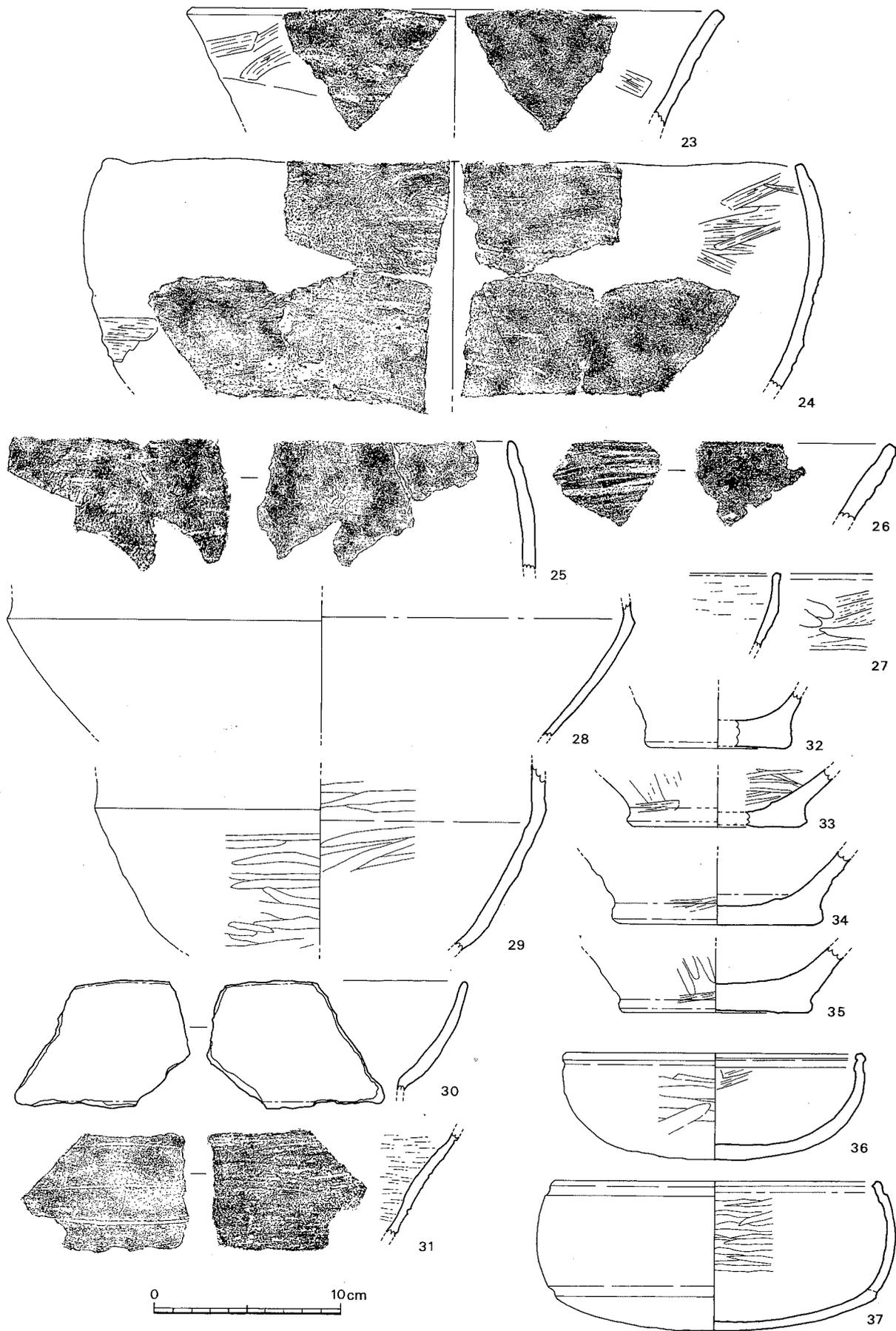
第10図 第4層出土縄文土器実測図③ (S=1/4)

残すが内面はほとんどナデ消されている。25も同様の調整をなす。27は褐色の精製品である。内面はケズリ、外面は研磨によって器面調整をおこなっている。

椀(マリ)形土器(36・37)37は精製品である。36は暗褐色で器壁が厚く、雑な研磨が施されている。口縁部内面に沈線状の段をもつ。37は器壁が薄く仕上げられ、丁寧に研磨されている。胴部と低部の境に段があり、胎土に貝粉を含む特異な土器である。36とは逆に口縁部外面に沈線状の段をもつ。

低部(32~35)いずれも粗製土器のもので、平底である。33の内面にはヘラ状工具による部分的な研磨痕が残る。

その他(28~31)口縁部片(30)と胴部片がある。28・29はいずれも粗製土器胴部の屈曲部で、褐色をなす。29は内外面にヘラ状工具による研磨痕を残すが内面はナデ消されている。31は粗製品で沈線と沈線の間隔が長いものである。この種の土器は、出土量こそ少ないものの、県内の晩期遺跡に類例が多い土器である。内面はケズリによって調整されている。30は直口縁の口縁部で、胎土に貝粉が混入されている。頸部に屈曲をもつが、屈曲部の残存部がわずかであるため全体の器形は不明である。



第11図 第4層出土繩文土器実測図④ (S=1/3)

2. 石 器

(1) 剥片石器 (第12図・図版11)

削器(1)サヌカイト質安山岩製で、長さ70mm、幅69mm、厚さ16mmをはかる。大型剥片を素材とし、末端部に二次加工を施したものである。刃部に連続する未加工部にも、微細な刃こぼれ状の使用痕が認められる。

搔器(2)黒色黒曜石製で、長さ35mm、幅38mm、厚さ15mmをはかる。厚手の不定型剥片を素材とし、急斜な刃部を作出したもので、二次加工は小規模で不揃いである。刃部以外の側縁にも、微細な使用痕が断続的に残されている。素材の背面は求心的な剥離面で構成されており、主要剥離面も、背面と同一方向からの剥離である。打面及び末端には原礫面をとどめており、比較的小さな亜角礫から剥出されたことを示している。

使用痕跡を有する剥片(3)緑色の緻密な石材(軟玉?)からつくられており、長さ34mm、幅39mm、厚さ10mmをはかる。水摩円礫から剥出された不定型剥片の一部に使用痕と思われる剥離面が連続するものである。剥離面は微細で、規則的に並んでいる。

剥片(4)白色の不純物を多含する黒色黒曜石製で、長さ62mm、幅29mm、厚さ19mmをはかる。平面的には、整った形状の刃器状剥片であるが、厚みがあり、身の反りが強い。下端部には、原礫面が残されており、これを除去するかのような稜上加撃が認められる。主要剥離面のバルブ直下には、大きな不純物の塊があり、同様の小さな不純物が全体に散在している。

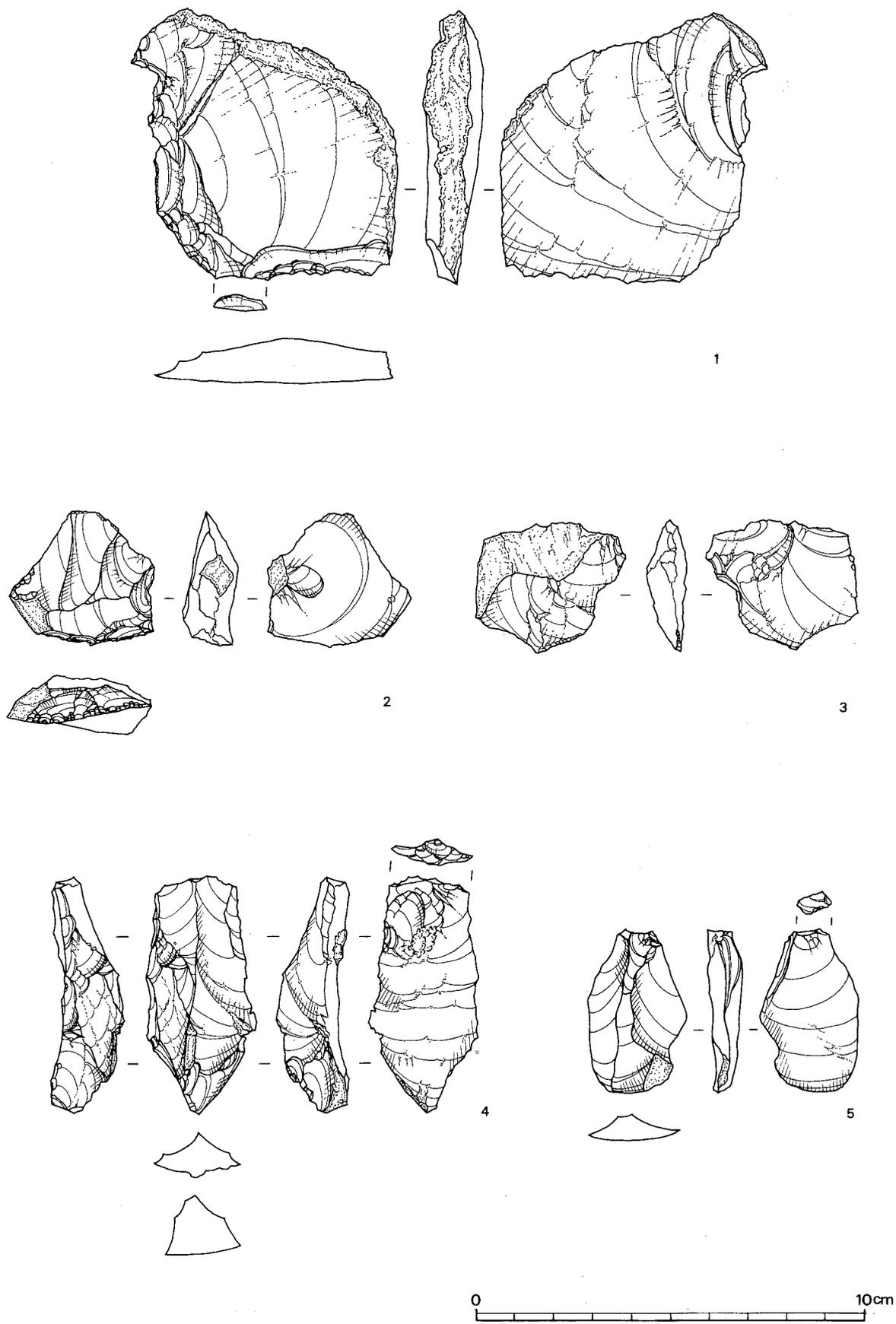
剥片(5)良質な黒色黒曜石製で、長さ42mm、幅25mm、厚さ9mmをはかる。4と同様の刃器状剥片であるが、両側縁は平行せず、膨らみを持っている。身の反りは小さいが、主要剥離面の末端は、ヒンジフラクチャーを生じて丸みを帯びている。背面下部の点描部はザラついた原礫面ではなく、パティナの進んだ剥離面状である。

円形削器(8)砂岩製でD区の表土層から出土している。長さ9.5cm、幅11.5cm、厚さ1.2cm、重さ189gを測る。湾曲する形状の凸部が自然面で、凹部が刃部作出の作業面である。全周の8割が刃部で、基部には厚さ1cmの平坦面を残している。

(2) 礫石器 (第13・14図 図版12)

打製石斧(6・7)いずれも安山岩製である。6は表採で、長さ25cm、幅5.5cm、厚さ2.4cm、重さ488gを測る。7はB区からの出土で、長さ21cm、幅7.5cm、厚さ2.2cm、重さ435gを測る。いずれも縦長の板石の先端部に刃部を作出し、基部は三角形に成形している。6の両側縁の中程には、打瘤がネガティブに残る。調整・加工作業の頻度が少ない粗製品である。

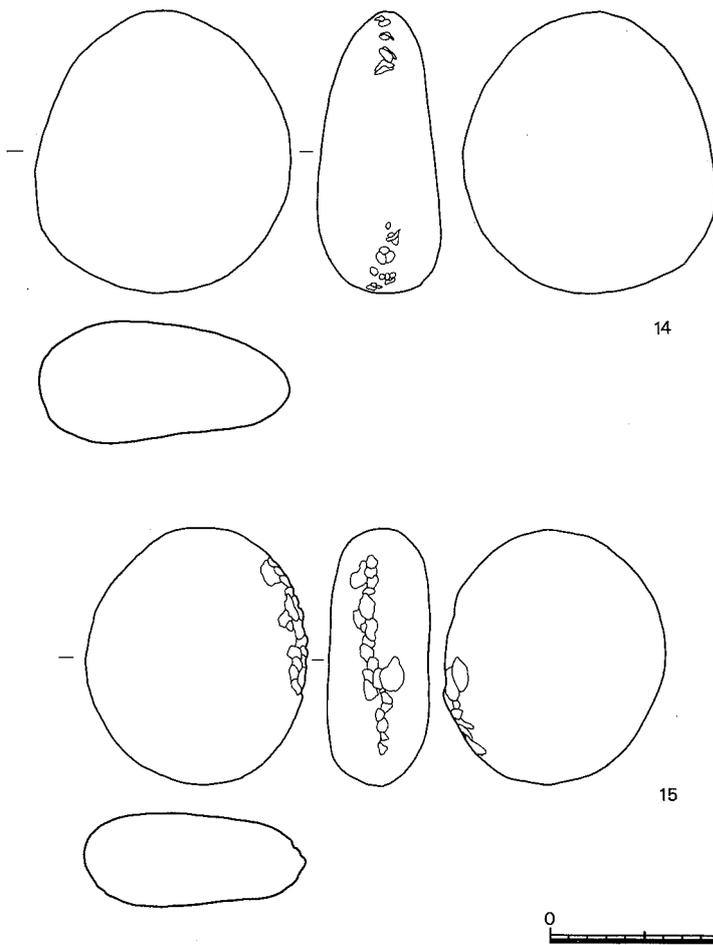
石錘(9・10・11・12)すべて切目石錘で、9は安山岩製、10は緑泥片岩製、11・12は結晶片岩製である。9はD区の第4層から出土し、長さ12cm、幅10cm、厚さ3.5cm、重さ548gを測る。10はA区の3層より出土し、長さ8.3cm、幅5.5cm、厚さ3.5cm、重さ100gを測る。長軸両端だけでなく、短軸両端も打ち欠いている。11はD区の第4層より出土した。長さ6.5cm、幅6cm、厚さ1.1cm、重さ74gを測る。12はB区の第4層から出土した。長さ8cm、幅4.5cm、厚さ0.8cm、重さ53gである。



第12图 剥片石器实测图① (S=2/3)



第13图 礫石器実測図① (S=1/3)



軽石製石製品(13) A区より出土している。長さ7.1cm, 幅5cm, 厚さ1.8cm, 重さ26gを測る。鹿児島県に出土例が多い舟形軽石加工品に類似する。

敲石(14・15) いずれも安山岩製で, 14はD区の第4層から出土した。長さ15.5cm, 幅14cm, 厚さ6.1cm, 重さ1.81kgである。長軸両端に打撃による使用痕をもち, 台状部に使用にともなう擦痕をのこす。15はB区から出土した。長さ13.5cm, 幅11cm, 厚さ4.9cm, 重さ1.11kgを測る。

第14図 礫石器実測図② (S=1/4)

3. 弥生時代・古墳時代の土器 (第15図, 図版10)

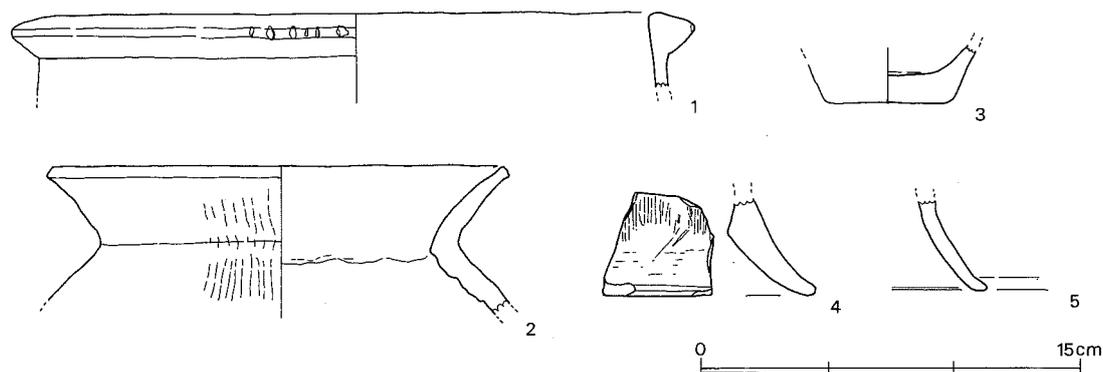
弥生土器・古式土師器がわずかであるが出土している。また、初期の須恵器は全く見られない。

1は弥生時代甕形土器口縁部。口縁に断面三角形の突帯が貼付され、先端に浅い刻み目が施されている。胎土に金雲母が混入することから搬入土器と思われる。弥生時代中期初頭に比定できる。

2は古式土師器甕口縁部。口縁部がわずかに外反しながら開口し、端部は平坦におさまられる。調整は外面に縦方向の粗いハケ目、口縁内部はナデ調整、胴部との接着部には粘土の貼り付け痕が観察される。5世紀代のものか。

3は弥生土器底部。底径が非常に小さく、全体に磨滅が著しい。4・5は台付甕底部、4は胎土に金雲母が見られ、肥後系搬入土器と判断される。

これらの土器はいずれも表土および第3層から奈良～平安時代の遺物と混在した状況で出土しており、今回の調査区での遺物包含層は確認されていないことから、国崎半島先端の限られた範囲に関連遺構が存在すると推測される。



第15図 弥生時代・古墳時代の土器実測図 (S=1/3)

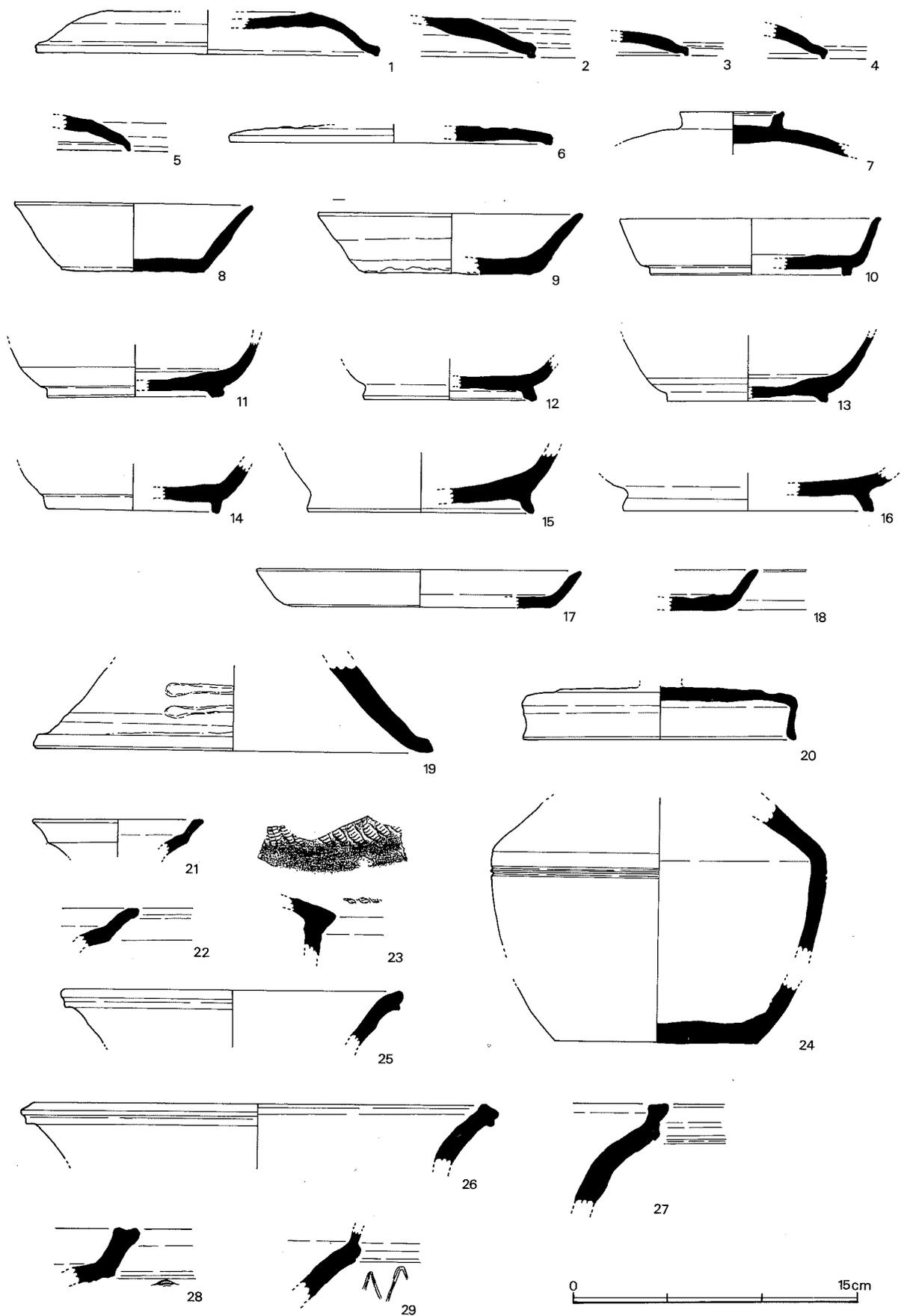
4. 奈良時代・平安時代の土器 (第16～18図, 図版8～10)

器種として、須恵器では蓋・杯・椀・甕・壺、土師器では皿・蓋・杯・椀・甕・かまどが判別できる。完形品は1点もなく、小片のものが大半をしめるが、復元可能なものなど61点を図化し説明をおこなう。

須恵器 (第16・17図1～42)

1～7は杯蓋である。1は天井部中央が低くなる形態であり、口縁部にかけて丸く張りだし端部は外反する。2～5は蓋口縁部で、天井部が高く口縁部にかけて直線またはやや丸みを持ちながら端部にいたり、端部で下方に直立する。6は天井部の高まりがほとんどなく、端部が極めて短い形態。7は擬宝珠を有する杯で、同じものは昭和63年の同遺跡範囲確認調査の際に出土している。

8・9は平底の杯で、口縁部にかけてはほぼ直線的に開口する。10～16は有高台杯・椀である。10は唯一口縁の形態が判断されるものであり、口径に比較し器高が低い。11～13は高台が短く外へ開く形態。15・16は高台部が非常に長い。また14は高台が直立する。



第16図 奈良～平安時代の遺物（須恵器①）実測図（S=1/3）

17・18は皿で、口径に比べ器高が短く、口縁部の開きが大きい。

19は高杯底部で、脚端部の断面は長方形を呈する。内外面に自然釉薬の付着があり、外面には横方向に釉たれが見られる。

20は壺蓋、短頸壺の蓋である。天井部は平坦で中央に擬宝珠を有し、口縁部はほぼ直立し端部で外反する。21・22は小型長頸壺の口縁部であり、二重口縁の形態である。23は壺肩部の屈曲部と思われ、上面に列点文を施している。24は図上復元をおこなった壺胴部で、同一個体ではあるが器高については不明確である。肩部以下に2条の沈線を施す。25・26は広口壺口縁部は直上し端部が平坦におさめられる形態である。28・29は口頸部に波状の沈線文を施している。

30～34は短頸壺の口縁部である。30～32は体部内外面に叩き目を有する。30・31は自然釉の付着が見られた。33は口頸部が非常に短く肩部に肥厚をもつ形態(葉壺形)。34は口縁下位に突帯状のつくりだしがあり、頸部の反転が大きい。35は胴部把手貼り付け部、磨滅が顕著である。36～42は壺・甕の胴部であり、内外面に叩き目が見られるものを取り上げた。外面の主体的な叩き目は平行沈線および格子目、内面は同心円・円弧・平行条線など様々である。

土師器・土器 (第18図, 図版9・10)

43～46は杯・碗の口縁部及び底部である。43は器壁が薄く、直線的に開口する形態。44・45は無高台で体部が丸く底部への屈折部が厚く肥厚する形態で、45は稜が顕著である。46は底部を欠き、高台の有無は不明である。47は高台付内黒碗、磨滅が著しい。48～50は皿か。底部はすべてヘラ切り痕を残す。

51～56は甕口縁部である。口縁部の形態としては、口縁部で「く」の字状に屈折する形態(51)、胴部から口縁部にかけて丸く大きい張り出しを有する形態(52・54)、口縁部から胴部にかけて、張り出しをもたず、直線的に移行する形態(53)、これより口縁部が短く端部が肥厚する形態(55・56)などに分類される。調整はすべて外面にハケ目、胴部内面に削り痕を残している。

57は牛角状把手。甕あるいは甕の胴部に貼付されたいたものである。

58・59はかまど焚口部の小片と思われる。断面は「T」字状で器面の調整は粗い。

60・61は製塩土器である。内面に布目痕が観察され、外面は手づくね状のナデ痕を残す。60は口縁部、61は底部付近であり、おそらく円筒形状の形態であろう。

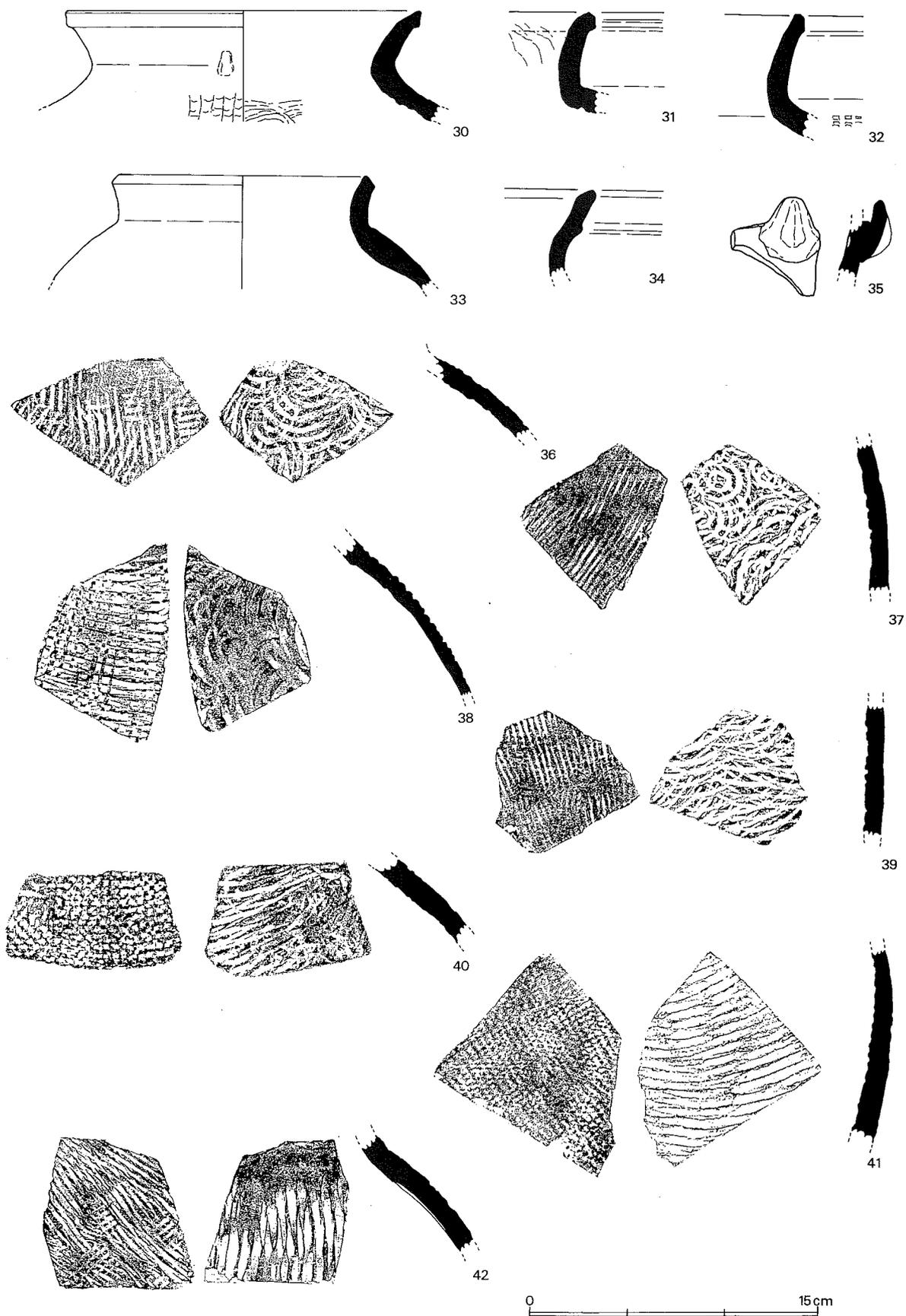
遺物の時期としては、須恵器・土師器ともほぼ同時期に編年されるものであり、主体としては8世紀後半から9世紀にいたる短期間に使用されたものである。

輸入陶磁器 (第19図, 図版10)

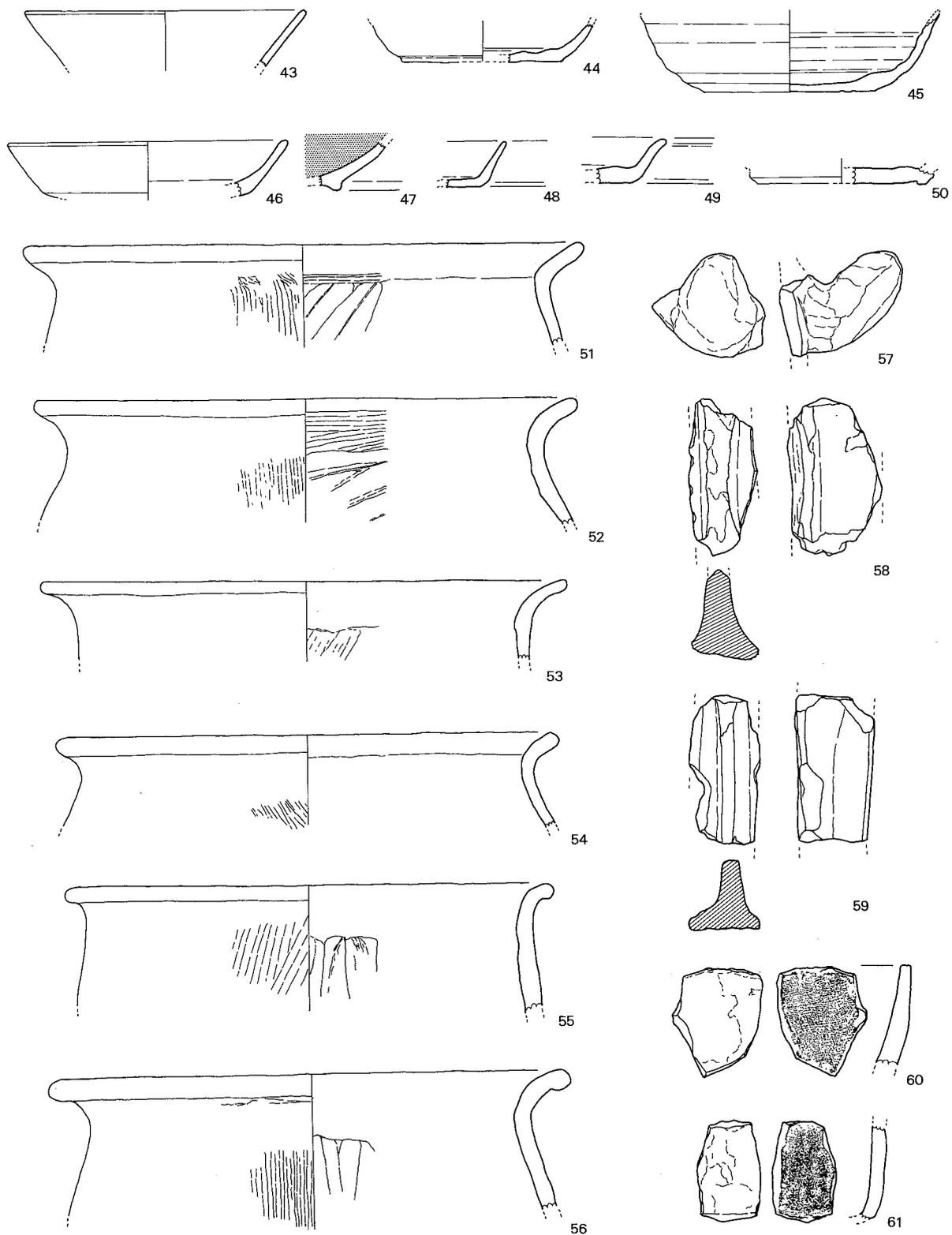
1は白磁底部。見込みには段は見られず、釉薬の下に線文を有する。高台は細長く削り出されており横田賢次郎・森田勉氏分類の碗V-3類に比定できる。12世紀初頭から14世紀中頃か。

2は青磁底部。かなりの磨滅が見られるが、見込みには中央に花卉、周囲に渦巻文がスタンプされている。龍泉窯系青磁の14世紀後半～15世紀代のものと考えられる。

最後に奈良～平安時代の遺物の出土状況について概観してみたい。今回の調査では調査地が狭範囲

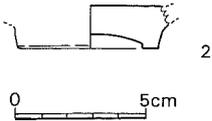
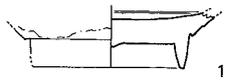


第17図 奈良～平安時代の遺物（須恵器②）実測図（S=1/3）



0 15cm

第18図 奈良～平安時代の遺物（土師器など）実測図（S=1/3）



第19図 輸入陶磁器

なことから遺構の確認には至らなかった。ただこの狭い国崎半島にこのように多量の遺物が包蔵されていることは疑問に思える節があり、前回の範囲確認調査報告書で指摘されたように、単純に漁業関連の遺跡とは考え難い。

下表は今回の調査で出土した古代の遺物統計表である。小片がほとんどで器種・部位が確認されるものは限定されるが、出土遺物の傾向としてとらえることができよう。

調査区はA～Dと任意に区切られているが、C・D区に行くにつれて増加する傾向があり、古代においての遺跡の中心部が調査区北側に存在することが窺える。

器種としては、須恵器甕・壺、土師器甕などの大形容器が全体の6割を占め、そのなかの須恵器・土師器の割合はほぼ同等である。また、かまどや製塩土器がわずかではあるが出土しており、古代における海岸遺跡独特の性格を有している。またその後の中世の遺物は減少し、輸入陶磁器などは出土遺物総数の比率からすると極めて少ない。土器の様相から遺跡の性格を判断すると、輸入陶磁器または搬入土器の割合が少なく貿易中継所としての機能は考えられない。また遺跡の立地する国崎半島は

0～5mの標高で、台風時は西からの強風により全域が海水を被るため、集落を形成するに困難である。大形の貯蔵用土器の比率が多く、製塩土器がわずかであるが出土していることから、製塩関係遺構が存在したことは間違いないであろう。西彼杵郡大瀬戸町串島遺跡において同様な様相を示しており、周辺の広範囲地域から望むことのできるこれらの遺跡は古代の警備の要所として利用されたことも推測される。

第1表 国崎遺跡出土 奈良～平安時代出土 遺物統計表

種別	器種	A区	B区	C区	D区	計	比率
須恵器	蓋	3	3	2	4	12	1.5
	杯・椀(高台)	4(1)	5(4)	5(2)	10(3)	24(10)	3.0
	甕・壺	60	40	63	72	235	28.9
	不明	4	0	0	3	7	0.9
土師器・土器	皿	7	15	22	17	61	7.5
	杯・椀(高台)	7(1)	8(3)	16(3)	25(3)	56(10)	6.9
	蓋	2	3	0	2	7	0.9
	不明	8	14	31	30	83	10.2
	口縁部	6	10	25	17	58	7.2
	底部	2	4	1	1	8	1.0
	胴部ほか	34	43	90	87	254	31.3
かまど		1	2	3	6	0.7	
計		137	146	257	271	811	100.0

() は内数である。なお、「土師器・土器」の中には弥生・古墳時代の土器と区別できないものも含まれているが、該期の遺物は少ないことから、出土傾向にさほどの影響は及ぼさないものと判断している。

獸 骨 (図版13・14)

第2表 獣骨一覧表

No	種 類	部 位	出 土 位 置	備 考
1	鹿	頭蓋骨 (左) 眼こう	C・D区表土 (第1・2層)	
2	鹿	中手骨		
3	鹿	角	A区表土 (第1・2層)	加工痕 (切り離し)
4	鹿	下顎骨 (右)	〃	P ₂ ・P ₃ 残存
5	鹿	寛骨 (左)	C・D区表土 (第1・2層)	
6	鯨 類		C区表土 (第1・2層)	加工痕あり
7	海棲ほ乳類		D区表土 (第1・2層)	
8	海亀の一種		B区第3層	
9	〃		A区第3層	
10	〃		D区第3層	
11	〃		A区表土 (第1・2層)	
12	〃		A区第3層	
13	〃		B区表土 (第1・2層)	
14	〃		C・D区表土 (第1・2層)	
15	犬	寛骨 (右)	B区表土 (第1・2層)	
16	〃	寛骨 (左)	B区表土 (第1・2層)	
17	〃	脛骨 (左)	B区5層	
18	〃	大腿骨 (右)	B区5層	
19	〃	中足骨 (右) Mt III	B区表土 (第1・2層)	
20	〃	中足骨 (右) Mt IV	〃	
21	猪	上顎骨 (右) M ² M ¹ P ⁴	D区B-NO 3	咬耗なし P ⁴ ウ歯
22	〃	上顎骨 (左) M ¹ M ² M ³	D区B-NO 6	M ¹ M ² 歯頭部ナメル質なし M ³ エナメル質咬吃点 (象牙質露出)
23	〃	上顎骨 (下顎角)	D区第4層	
23	〃	下顎骨 (左) 下顎枝	B区-NO 5	
25	〃	下顎骨 (左) P ₄ M ₁ M ₂	D区-NO 4	
26	〃	下顎骨 (左)	D区-NO 7	
27	〃	下顎骨 (左) P ₃ P ₄ M ₁ M ₂	D区-NO 8	
28	〃	脛骨 (左)	C区-NO 1	
29	〃	大腿骨 (右)	C・D区表土 (第1・2層)	
30	〃	上腕骨 (右)	D区-3層	
31	〃	肩甲骨 (右)	C区-NO 5	
32	〃	指骨	C区-NO 6	
33	〃	中手骨 Mt III (r.)	C区-NO 6	
34	〃	踵骨 (左)	D区表土 (第1・2層)	
35	マ ダ イ	上顎歯骨 (左)	D区-NO 1	
36	〃	下顎歯骨 (右)	C区第3層	
37	〃	下顎歯骨 (左)	B区第1層	
38	〃	頭骨	C・D区表土 (第1・2層)	
39	〃	脊椎骨	C・D区表土 (第1・2層)	

VI. 総 括

1. 縄文晩期前半の土器について

(1) はじめに

今回の国崎遺跡の調査では、出土量は少ないものの縄文晩期の土器を比較的まとまった形で出土した。ここでは、本県を中心に縄文晩期前半の土器についてまとめてみたい。

(2) 研究史抄と研究の現状

長崎県の縄文晩期土器の研究は、晩期後半の土器の研究が中心となり、晩期前半の土器については少ないといえる。坂田邦洋は、1964年から1965年に調査をおこなった長崎市深堀遺跡の報文のなかで第4層出土の深鉢形土器を、I類からV類に、浅鉢形土器をI類からVIII類に分類し、出土した晩期土器が3時期に細分できる可能性を示唆している(坂田1967)。古田正隆は、1974年におこなった国見町筏遺跡の報文のなかで筏遺跡出土の後期末から晩期の土器を1類から7類に分類し、筏1・2類土器を西平式土器に、筏3・4類土器を三万田式土器に、筏5・6類土器を御領式土器に、筏7類土器を黒川式土器に、それぞれ併行するものとした(古田1974)^{註1}。その後、古田は1977年に実施した有明町中田遺跡の調査図録において、中田遺跡出土土器を御領式(筏5・6類)土器として報告し(古田1977)、同遺跡を御領式段階の単純遺跡とした。安楽勉は、1987年におこなった東彼杵郡東彼杵町の白井川遺跡の報文のなかで、長崎県下出土の縄文晩期土器を概観し、晩期をI期からV期に分け、I期とII期に長崎市深堀遺跡第IV層出土土器群をあて、III期を黒川式土器に代表させ、IV期以降は刻目突帯文土器の時期とした(安楽1990)。

このように、先学によって編年の努力がおこなわれているものの、現在のところ、本県の縄文晩期土器の編年は賀川光夫による編年案に依拠するケースが多いといえよう。すなわち晩期土器の型式名に遺跡名をつけることによって生じる煩雑さを避け、晩期I式・II式・III式の型式名を与え、九州全体を把握しようという試みである(賀川1969)。賀川はのちにI式をI式aとI式bに細分した(別府大学1980)。長崎県独自の晩期前半の土器編年案が確立していない現状にあって、賀川編年は長崎県にとって有効ではある。しかしながら、現在の九州における研究動向が各県あるいは旧国単位の編年の確立に進んでいる現状を考えると(山崎・島津1981)、今後の長崎県における晩期前半の土器編年確立が急がれるところである。

(3) 島原半島における縄文晩期前半の土器編年

従来、島原半島の縄文晩期土器の変遷として、有明町中田遺跡出土土器→島原市三会礫石原遺跡出土土器→深江町山の寺梶木遺跡出土土器(刻目突帯文土器の段階)という変遷が考えられてきた。中田遺跡出土土器が、古田によって御領式土器と認定されたことは前述したが、近年の九州における研究の成果に照らすと、中田遺跡出土土器は御領式土器に後続する型式の土器群の可能性が高い。^{註2}

礫石原式土器については、従来の島原半島における編年観からすると、縄文晩期前半の土器型式すべてを包括したものとなっていた。すなわち晩期前半の土器を礫石原式土器に代表させ、そのなかで

古相と新相に分けていたのである。一方、礫石原式を黒川式（鹿児島県黒川洞穴出土土器）に併行する型式として理解した場合、御領式と礫石原式の間には二型式ほどの空白を生じることになる。国崎遺跡の縄文土器を報告するにあたって、この問題に若干の見通しを示すべきであろうと思う。ここでは、検証すべき問題はあるものの、礫石原式を黒川式にほぼ併行する土器と認定し、御領式との間に生じる間隙をある程度埋めた後で報告をおこないたいと考える。

最近、調査報告された長崎県島原市畑中遺跡(村川・安楽1994)出土の深鉢形土器は、御領式土器の系譜をひくタガ状口縁に凹線文あるいは沈線文という口縁部をもつ型式がなくなり、タガ状口縁が外方に開くことによって生じた、く字形口縁に多条沈線の文様帯をもつ型式が主流を占めている。さらには、直口縁で胴部が屈曲して張り出し、条痕を中心として器面調整を行う黒川式の深鉢がみられない。浅鉢形土器は口縁部外面に沈線をもち、内面に段をもって、口縁部から胴部にいたる頸部が間延びしているもの(報告書ではC-Ⅲ類)と、口縁部外面に沈線はなく、内面の段のみで、頸部は短く屈曲して胴部にいたるもの(報告書ではC-Ⅳ類)が中心で、国崎浅鉢C類のような黒川式土器に典型的な浅鉢を含まない。こうした畑中遺跡の深鉢・浅鉢の検討からして、畑中遺跡出土土器は、御領式土器に後続し、黒川式土器より古く位置づけられる土器群と考える。

なお、島原半島に隣接する熊本県では、黒川式土器の前に古閑式土器が編年されている(別府大学1980)が、畑中遺跡出土の深鉢形土器と類似点が多い。^{註3}

以上のようなことから、島原半島における縄文晩期前半の土器の変遷については礫石原式を黒川式併行の土器とするという前提にたつて、有明町中田遺跡出土土器(御領式土器に後続する型式の段階)→島原市畑中遺跡出土土器→島原市礫石原遺跡出土土器(黒川式段階)としたい。^{註4}

(4) 若干の考察

ア. 第4 a層出土土器の編年的位置づけ

第4 a層から出土した深鉢形土器は、直口縁のA類(第8図1・3)のみで、タガ状口縁のB類を含まない。さらには、刻目突帯文土器を含まない。しかしながら、出土した深鉢A類は縄文晩期を通じて出土する型式の土器であるため、その帰属については確定が困難である。浅鉢形土器には縄文晩期を通じて存在する直口縁のA類(第8図2)と礫石原式とおもわれるC類(第8図7)がある。C類は、典型的な礫石原式とみなせる。底部が尖底で、特徴的な器形だが、鹿児島県榎崎B遺跡出土の浅鉢M類(井ノ上ほか1993)、北九州市貫川遺跡第4地点出土で、精製浅鉢K類と分類されたNO531の土器(前田1988)、長崎県島原市稗田原遺跡出土晩期土器など^{註5}に酷似する。これらの類例は未報告の稗田原遺跡出土例を除き、黒川式として報告されている。鉢(皿)形土器(第8図8)は、復元口径が50cmを越える大形品である。直口縁のこの種の土器も晩期を通じて存在する。その他の土器としては、リボン状突起をもつ土器(第8図5)がある。九州でリボン状突起が出現するのは縄文晩期前半中葉で(山崎・島津1981)、盛行するのは黒川式土器の段階であろう。

以上、第4 a層の土器を検討すると礫石原式の範疇に属するものとして大過ないものと思われ、晩期を三分割した場合の中葉にあたる。

イ. 第4層出土土器の編年的位置づけ

第4層から出土した深鉢形土器は、御領式の系譜に属するタガ状口縁をもつ深鉢B類が主体をなす。本県で、この種の土器がまとまって出土した例は少ない。先述の有明町中田遺跡出土深鉢形土器と比較すると、タガ状口縁に文様帯をもつ国崎深鉢B—1類は、中田遺跡出土のものより口縁が外に開く傾向をもっており、文様帯に沈線をもたない国崎深鉢B—2類は中田遺跡では出土がきわめて少ない。したがって、国崎遺跡第4層出土土器はタガ状口縁の外傾化・無文化が進んだ型式と理解するが、現状では、中田遺跡出土土器段階の土器群と考える。したがって、国崎遺跡第4層出土土器の一部は御領式土器に続く土器型式と考えられる。県外であるが、近接する熊本県菊池市天城遺跡出土の深鉢A—2類は国崎深鉢B—1類に、天城遺跡深鉢B—3類は国崎遺跡深鉢B—1類にそれぞれ類似する。天城遺跡出土のⅢ式土器も天城式土器として、御領式土器に後続する型式とされている(島津1980)。次に同じ第4層出土土器でも深鉢C類とした第10図21の土器は、「く」字形に外へ開く口縁部に4条の沈線をめぐらしている。本県では、長崎市深堀第Ⅳ層出土深鉢Ⅱ類に類例があるが、深堀深鉢Ⅱ類は、口縁部文様帯の沈線が10本前後ときわめて多条化しているので、第10図21土器より後出する型式の可能性もある。それよりも前述した島原市畑中遺跡出土深鉢B群Ⅱ類土器に極めて類似し、同型式といつてよいであろう。

以上のように、第4層より出土した土器は、二型式の土器からなり、一方は有明町中田遺跡出土土器とほぼ同時期のもの、一方は島原市畑中遺跡出土土器と同型式のものである。いずれにしても晩期を三分割した場合の前葉に比定できる。

ウ. 底部に段をもつ椀(マリ)形土器について

第4層より出土した椀(マリ)形土器(第11図37)は、胴部と底部のあいだに段をもっており、特異な形態である。類例として南高来郡西有家町風呂川遺跡(安楽1982)の晩期包含層より出土した精製浅鉢がある。第11図37と比較すると口縁部の形態が異なるものの、胴部から底部にかけてはよく似ている。共伴する土器は黒川式の範疇に含まれるものである。県外の類例はいまのところ寡聞にして知らない。したがって、現在のところ二例ではあるが島原半島以外に同型式のものが見い出せないことから、この種の浅鉢形土器を便宜的に「国崎タイプ」の浅鉢として今後の類例発見を待ちたい。

2. 縄文晩期前半における剥片剥離技術について

国崎遺跡第4層より出土した剥片(第12図4・5)は縄文後期に西北九州において盛行する鈴桶型縦長剥片剥離技術(橘1978)の系譜に属するものと考えられる。第4層は、縄文晩期前葉の土器を包含する層であるため、この剥離技術がすくなくとも縄文晩期初頭まで残存することが理解される。

これまで、縄文晩期後半から剥片剥離技術が変化することは指摘されており(橘1984)、その画期が縄文晩期前半であろうという予想があり、指摘もあった。さらには、剥片剥離技術の盛衰には地域差があることも予想されている(吉留1993)。国崎遺跡から出土した縦長剥片はわずか2点であり、深く

考察することは困難であるため、前述のごとく鈴桶型剥片剥離技術の系譜を引く技術がすくなくとも縄文晩期初頭まで国崎遺跡では残ることが指摘できるにすぎない。縄文晩期初頭における鈴桶的な縦長剥片剥離技術の残存については、福岡県二丈町広田遺跡で指摘されている(橘1984)。本県においては縄文晩期前半の遺跡調査例が少なく、確実な出土例や報告例がない。

3. 国崎遺跡における礫石器について

国崎遺跡から出土した礫石器のうち表採された第13図6やB区出土の第13図7の資料は特徴的な礫石器である。伴出土器がなく、時代が特定できないうらみがあるものの、原石の形状を最大限に生かし、必要最小限の剥離によって目的とする機能をもつ石器を作出していることが特徴である。これらの石器の本来の機能は明確にはできないが、粗製石器といってもよい成形によって作られている。この成形方法が石器本来の機能と関連することは想像に難くない。このことは、この種の石器が大量にかつ迅速に供給される必要があった作業に使用されたものと考えられるが、これ以上の考察は資料的な限界から困難である。今後の類例の増加を待ちたい。

また、A区より舟形軽石加工品が出土している。鹿児島湾沿岸に多くみられるものである(上村1991)。今後の調査においても留意する必要がある。

- 註1 古田の筏遺跡における土器編年については、富田の見解がある(富田1987)。
註2 古田も中田遺跡図録中で浅鉢形土器は「2～3形式に分類も可能である」としている。御領式にはみられない器形で、古田自身「礫石原式への移行期」の浅鉢と認識しているものが存在する。深鉢形土器についても、口縁部文様帯が狭く、文様も沈線となり、口縁部が外傾するものが多いなどといった点がみられ、御領式土器より新しい傾向がうかがえる。
註3 浅鉢形土器についても、畑中遺跡の浅鉢C-Ⅲ類は古閑遺跡の浅鉢G類に、畑中遺跡の浅鉢C-Ⅳ類は古閑遺跡の浅鉢J類に該当しそうである。
註4 島原半島における縄文晩期前半の土器の変遷については、県文化課の宮崎貴夫氏より教示をえた。
註5 現在、長崎県文化課において整理中で、近く報告書刊行の予定である。

[引用・参考文献]

- 安楽 勉・伴耕一郎 1990 「白井川遺跡(Ⅱ)」東彼杵町文化財調査報告書第4集 東彼杵町教育委員会
安楽 勉 1982 「風呂川遺跡」西有家町文化財調査報告書第1集 西有家町教育委員会
賀川光夫 1969 「縄文晩期文化—九州—」『新版考古学講座第3巻 先史文化—無土器から縄文』雄山閣
上村俊雄 1991 「南九州における舟形軽石加工品と帆船について」『鹿大史学』第38号
坂田邦洋 1967 「土器」「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号 長崎大学医学部解剖学第二教室
島津義昭・清田純一 1980 「天城遺跡—熊本県菊池市大字赤星字天城—出土縄文土器の報告」『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告第47集 熊本県教育委員会
橘 昌信 1978 「縦長剥片—西北九州における縄文時代の石器研究1—」『史学論叢』第9号
橘 昌信 1984 「縄文晩期の石器—西北九州における縄文時代の石器研究(6)—」『史学論叢』第15号
富田紘一 1987 「太郎追遺跡の縄文土器(2)」『肥後考古』第6号 肥後考古学会
古田正隆 1977 「中田遺跡図録 御領式(筏5・6類)の単純遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告第8集 百人委員会
古田正隆 1974 「筏遺跡—縄文後・晩期の埋葬遺跡—」百人委員会埋蔵文化財報告第4集 百人委員会
別府大学考古学研究室 1980 「古閑遺跡」『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告書第47集 熊本県教育委員会
前田義人・山手誠治 1988 「貫川遺跡1」北九州市埋蔵文化財調査報告書 第73集(北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室)
村川逸朗・安楽 勉 1994 「畑中遺跡」島原市埋蔵文化財調査報告書第9集 島原市教育委員会
山崎純男・島津義昭 1981 「晩期の土器—九州の土器」『縄文文化の研究4』縄文土器Ⅱ 雄山閣
吉留秀敏 1993 「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価—早良平野を中心として—」『古文化談叢 第30集』古文化談叢発刊20周年 小田富士雄代表選暦記念論集(Ⅰ)

Ⅶ. ま と め

国崎遺跡から、縄文晩期の遺物が出土することは以前から知られていたが、今回の調査により比較的まとまった包含層が存在することがわかった。県内では、これまでに発掘調査された縄文晩期前半の遺跡が少なく、貴重な資料といえよう。国崎遺跡では、縄文中期から晩期にかけて営々とした人間の営みが確認されたわけで、こういう遺跡の継続期間は橘湾沿岸では比較的多くみられる(藤田1989)。

一方、従来から島原半島周辺、とくに半島北部・東部では、縄文晩期の遺跡の標高と遺跡分布の相関から遺跡分布に2つのピークがあることが指摘されていた(久原1995)。具体的には、標高0m～39mの遺跡分布と標高200m付近の遺跡分布のピークである。島原半島のこのような遺跡分布についての特異性については、久原巻二や宮崎貴夫の考察がある。そこで指摘されているように、雲仙岳の山麓に広がる広大な火山性山麓扇状地を背景とした、なんらかの生産活動を基盤とした人々の営みが考えられる。(久原1995、宮崎1990)

一方、島原半島西部の海岸線は、ほぼ円形の落ち込みであるカルデラ(千々石カルデラ)の重複による地形で(太田1984)、山稜が直接、海に落ち込む地勢を示している。このような島原半島における東西の地形上の相違は、そこに居住した人々の生活にも違いを生じさせたことは想像に難くない。

国崎遺跡は、まさに千々石カルデラの縁辺部にあり、その立地や遺跡の内容から生業を橘湾に依存しながら、継続的に営まれた遺跡といえる。今回の国崎遺跡の調査は、県内で少なかった晩期前半の土器資料をつけ加えたことをはじめとして、晩期前半の低地遺跡に具体的事例を加えたことに第一の意義を見いだしておきたい。

また、国崎遺跡には、古代の遺物包含層も確認されている。多量の円礫や亜角礫に混在して出土することから、原位置を保つものではなく洪水や氾濫による堆積とみられ、遺構を伴わないため、遺跡の性格は不明である。しかし、国崎半島全体に古代の遺物が分布することは既にわかっていることで宮崎貴夫は、国崎半島の立地から肥最埼警固所と関連する防衛的・監視的施設の存在を想定し(宮崎・小野1989)、本報告において寺田正剛は製塩遺跡としての性格を示唆している。いずれにせよ、古代の国崎遺跡については今後も継続的に検討をしていかななくてはならないだろう。

[引用・参考文献]

- 小野ゆかり・宮崎貴夫 1989 「国崎遺跡」南串山町文化財調査報告書第2集 南串山町教育委員会
藤田和裕 1989 「築崎遺跡」飯盛町文化財調査報告書第1集 飯盛町教育委員会
久原巻二 1995 「地理的歴史的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫 1990 「肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報XⅢ』 長崎県文化財調査報告書第97集 長崎県教育委員会
太田一也 1984 「雲仙火山—地形・地質と火山現象」『雲仙の自然と歴史』国立公園「雲仙」指定50周年記念 長崎県

圖 版

図版1 遺跡遠景・近景



東から



北から



東から

図版 2 土 層



A 区西壁



C 区西壁
左は昭和63（1988）年の
範囲確認調査時の試掘壕
（T. P-E）

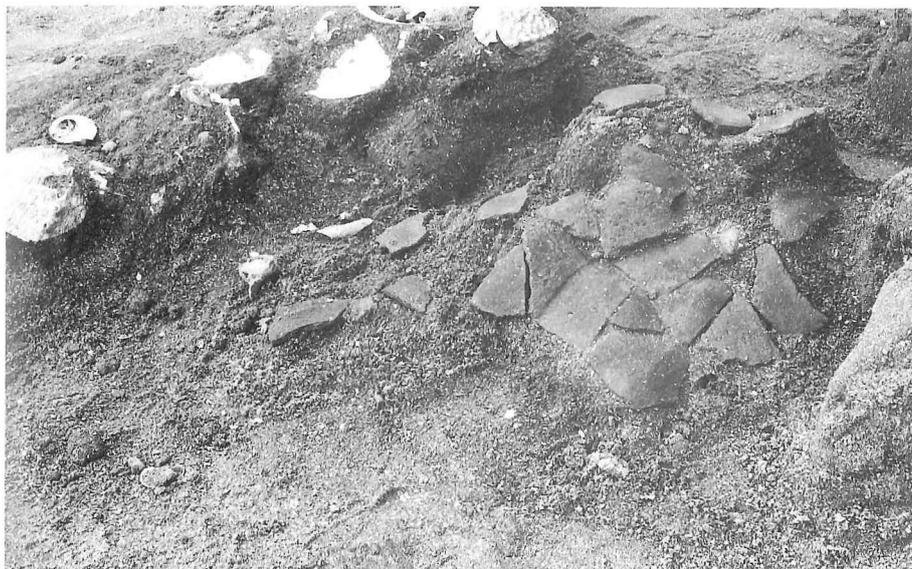


D 区北壁

図版 3 遺物出土状況



第3層出土
奈良平安時代の遺物



第4層出土
縄文土器



C区出土
小児骨

図版 4 縄文土器①



7

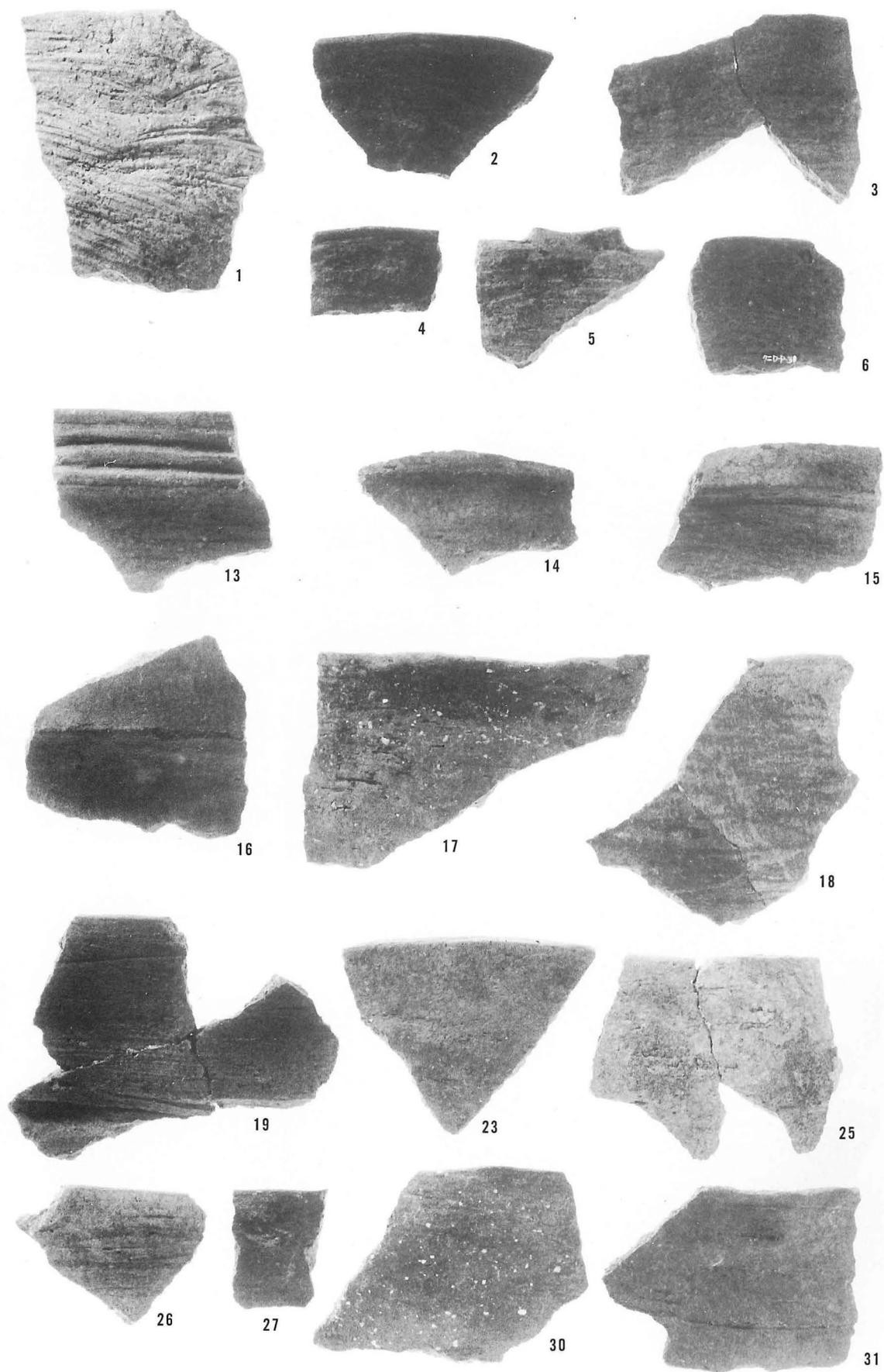


37



36

図版 5 縄文土器②



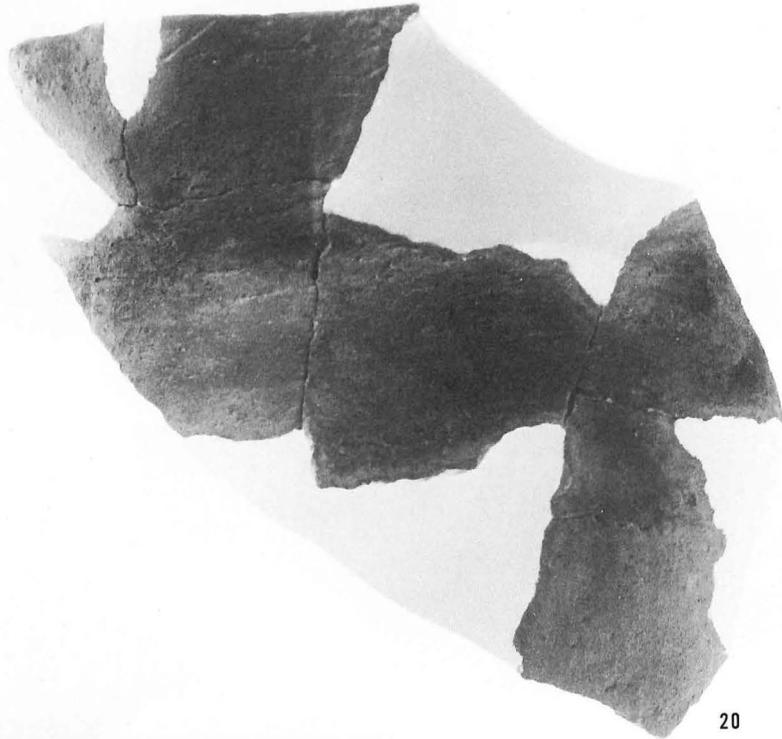
図版 6 縄文土器③



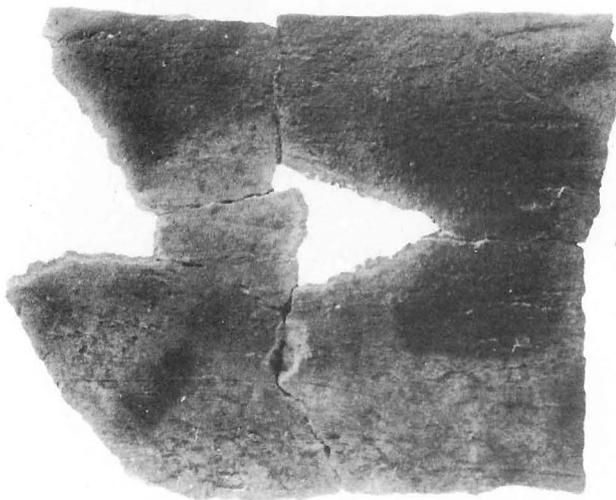
11



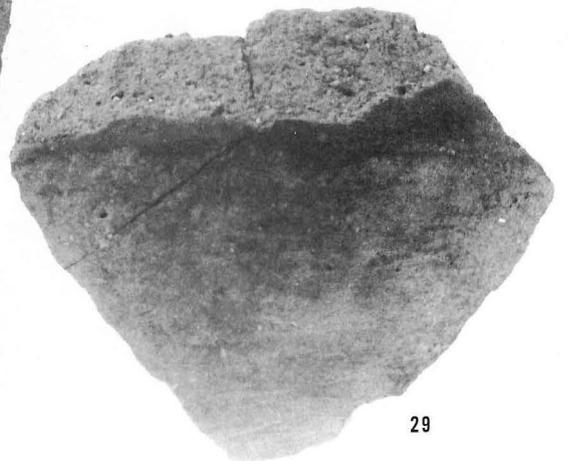
12



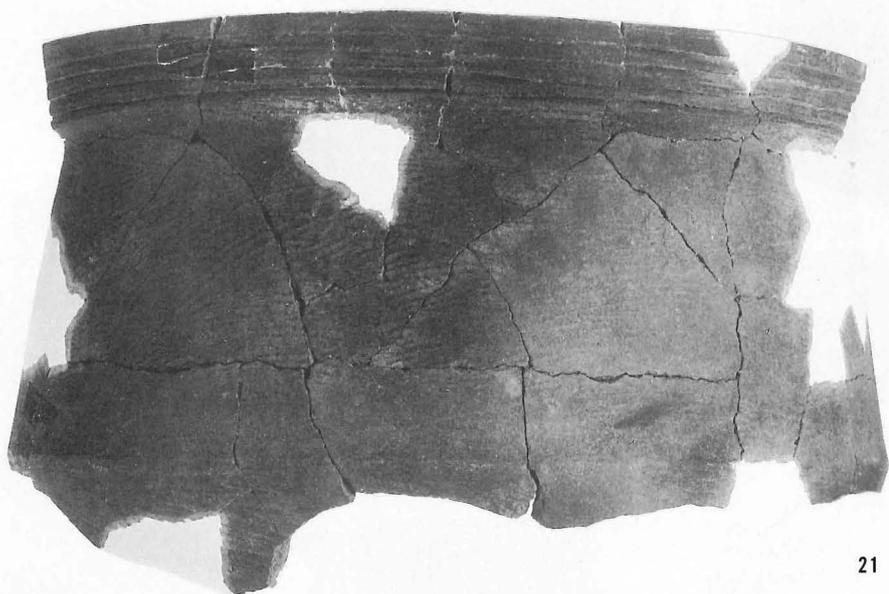
20



24



29



21

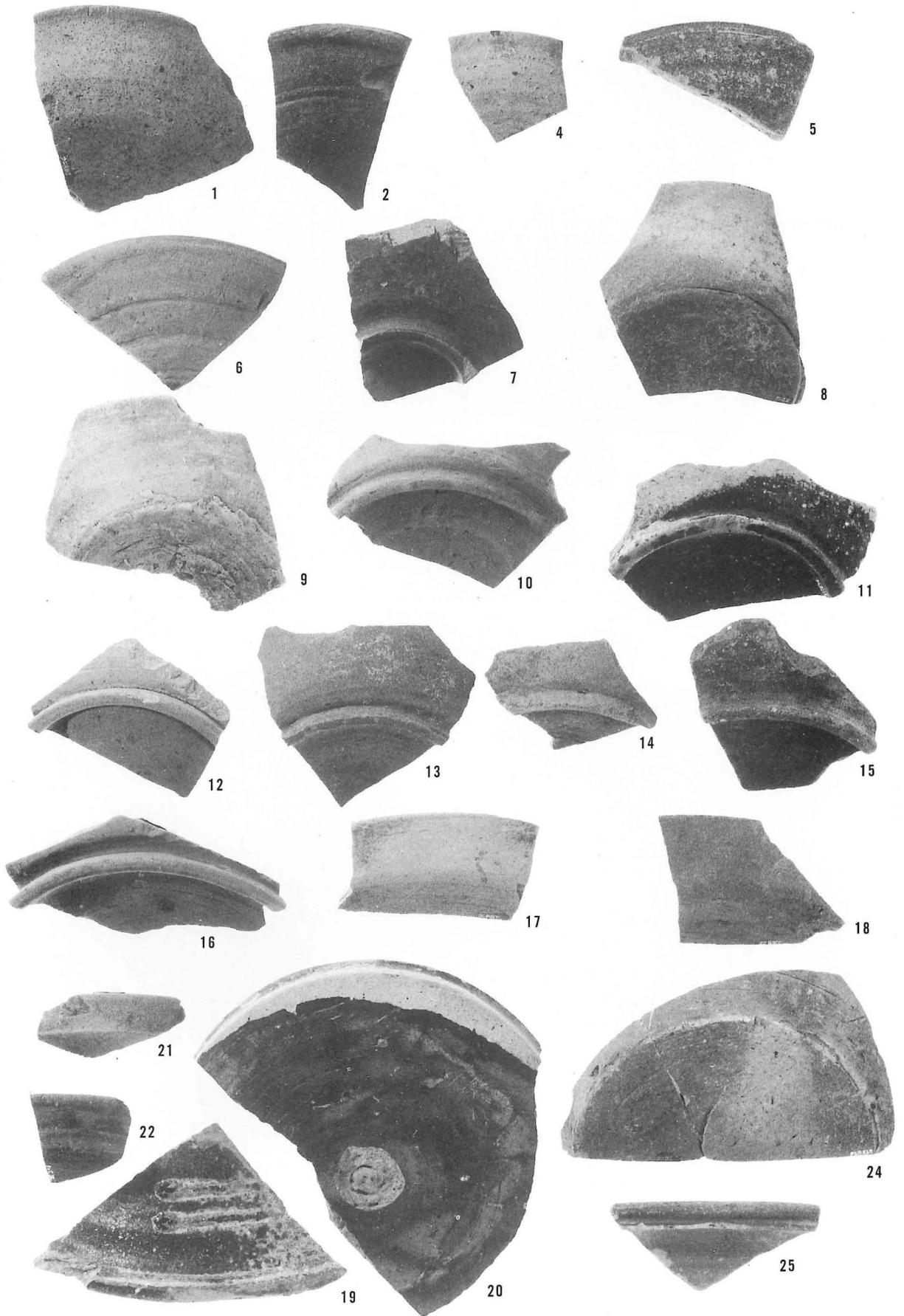


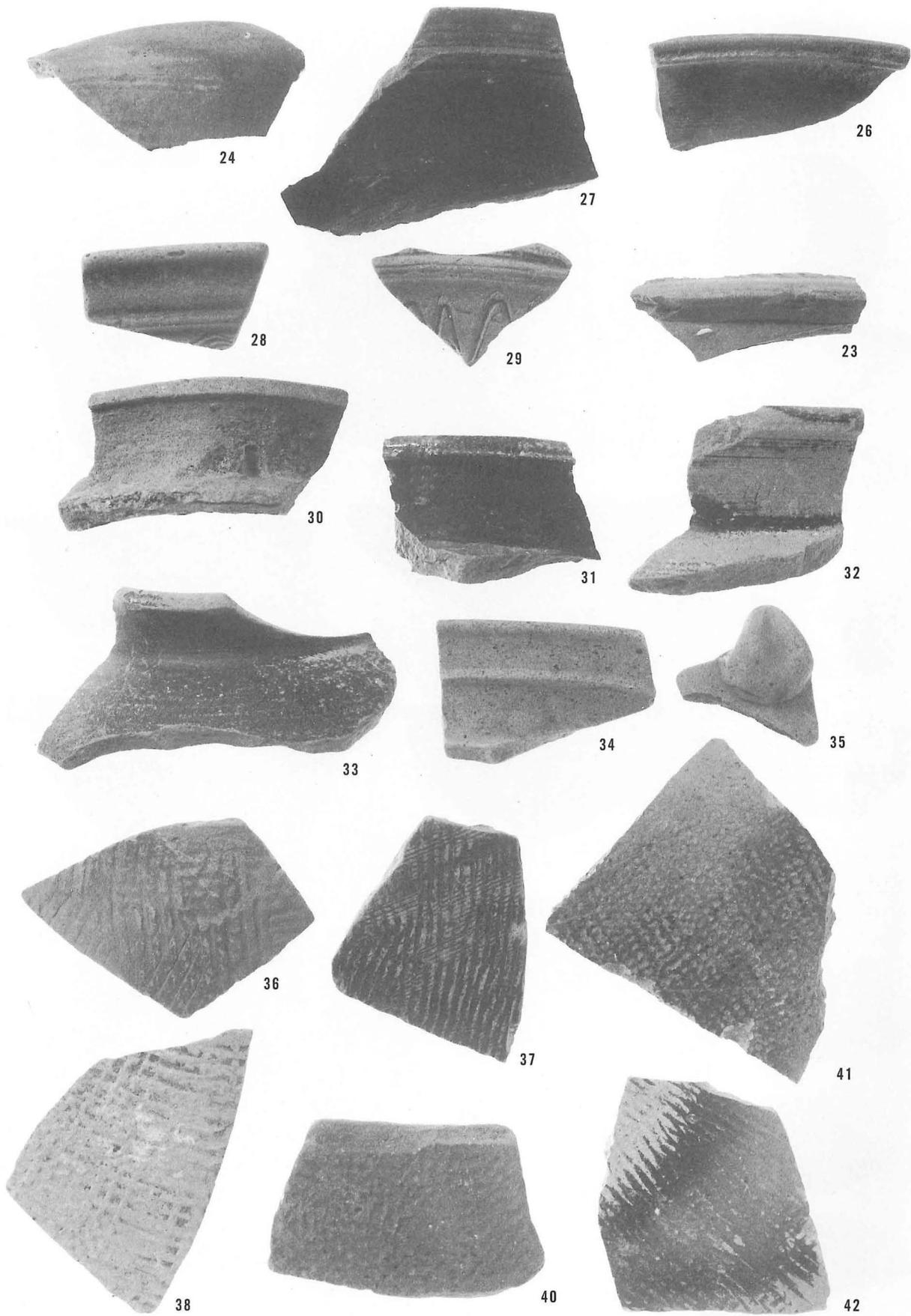
22



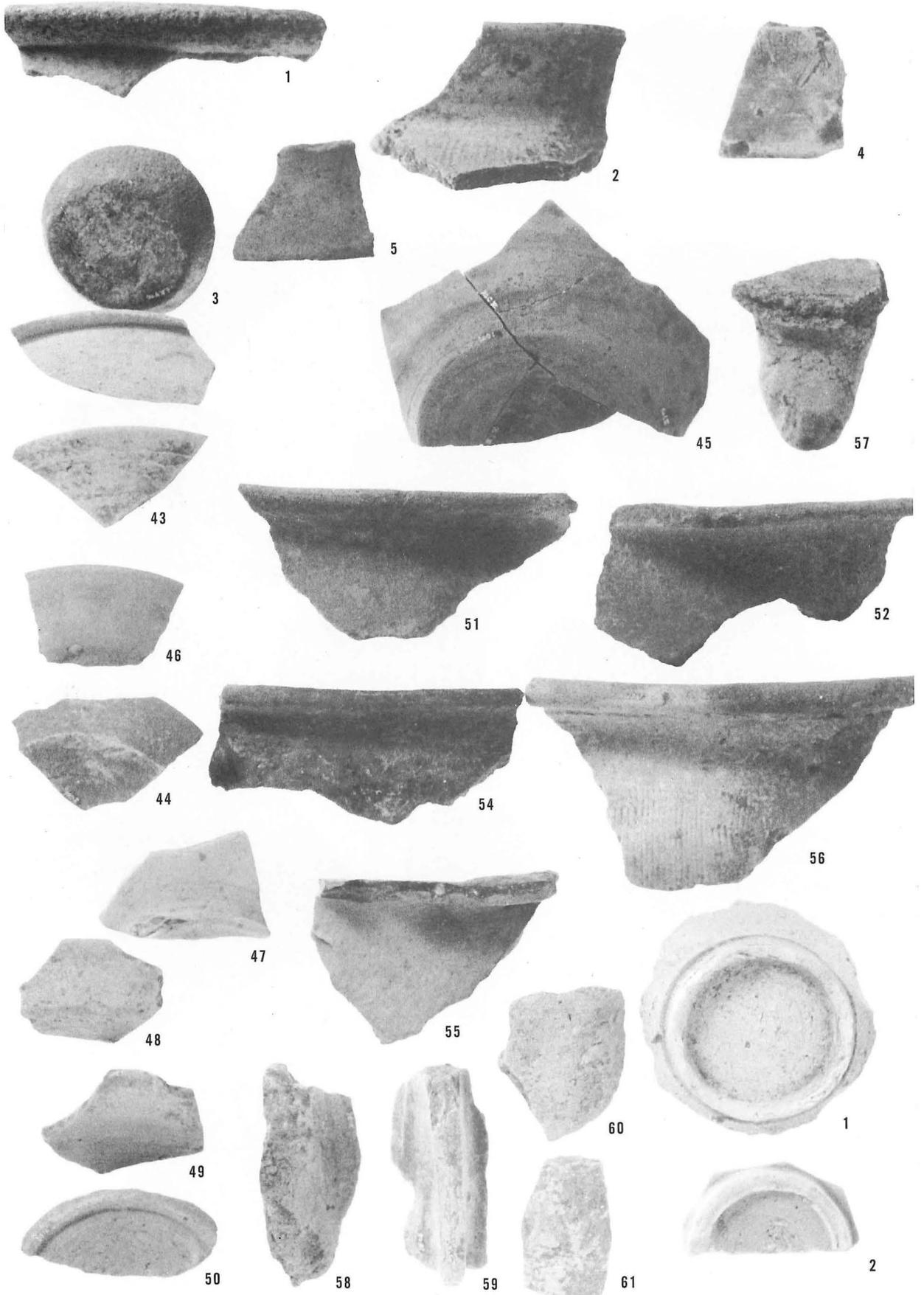
8

图版 8 須惠器①





図版10 弥生土器・土師器・製塩土器・輸入陶磁器など



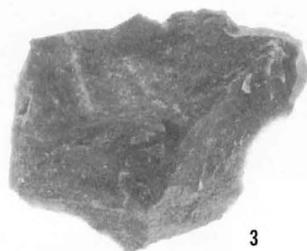
图版11 剥片石器



1



2



3



4



5

图版12 礮石器



6



8



9



10



7



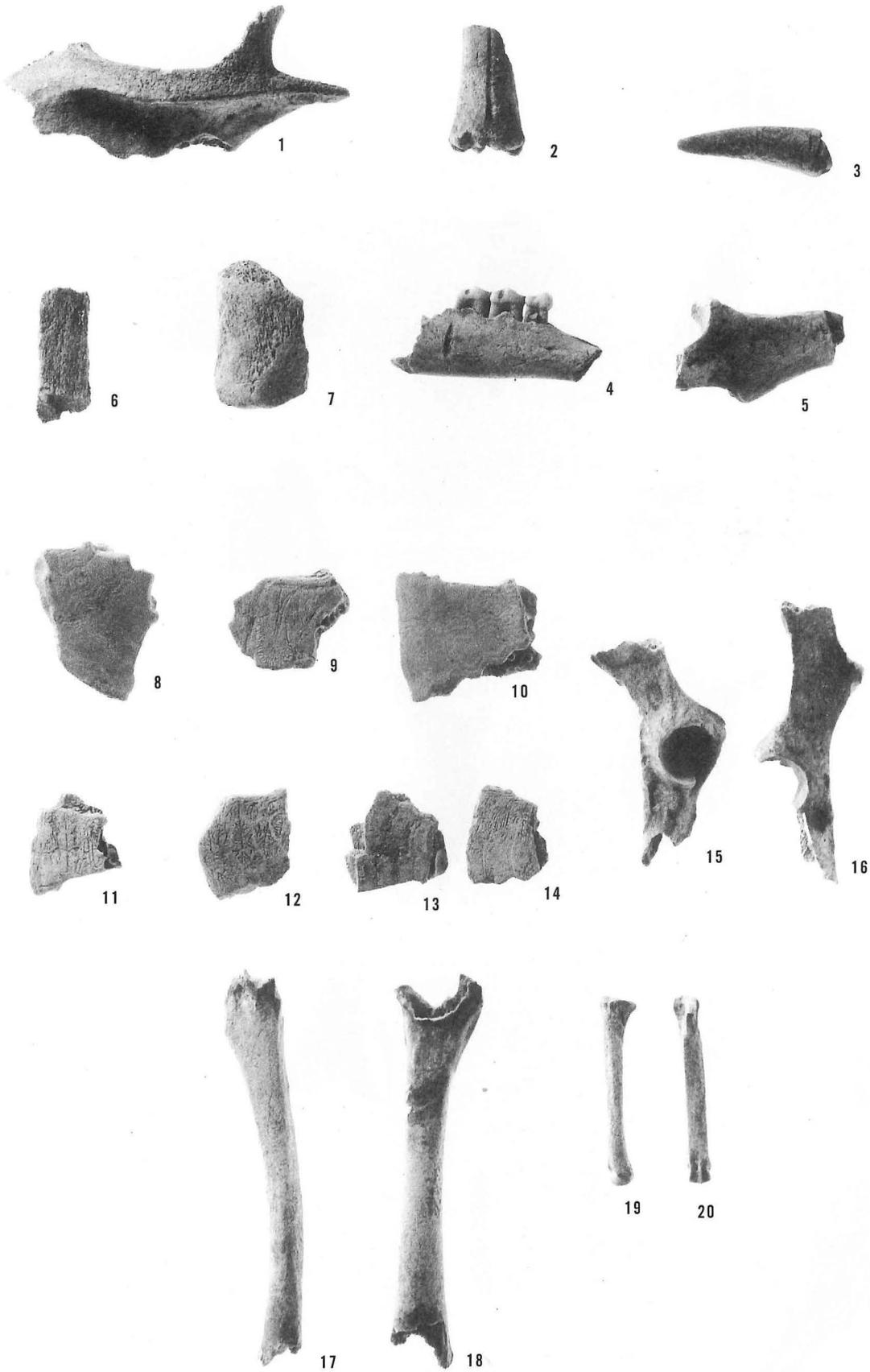
11



13



12



图版14 獸骨 ②



21



22



23



24



25



26



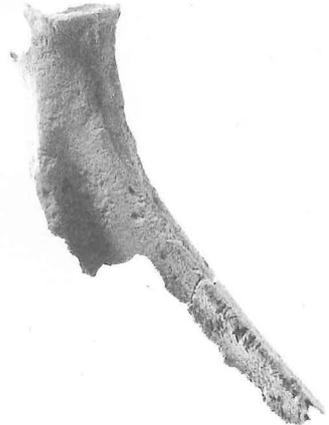
27



28



30



31



29



32



33



34

報告書抄録

ふりがな	くにさきいせき							
書名	国崎遺跡II							
副書名								
巻次								
シリーズ名	南串山町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	古門雅高・寺田正剛							
編集機関	長崎県南高来郡南串山町教育委員会							
所在地	〒854-07 長崎県南高来郡南串山町丙10263番地 TEL (0957)88-3114							
発行年月日	西暦1995年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
くにさきいせき 国崎遺跡	ながさきけん 長崎県 みなみたかきぐん 南高来郡 みなみくしやまちょう 南串山町 丙10263 番地	42368	8	32° 41' 09"	137° 45' 50"	19941205 19941221	96m ²	公園整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
国崎遺跡	遺物包含地	縄文 奈良 平安		縄文土器 石器 土師器 須恵器 青磁 製塩土器 人骨(小児) 獣骨				

VIII. 付 編

長崎県南串山町国崎遺跡出土の縄文時代幼児骨

分部 哲秋*, 佐伯 和信*, 長島 聖司*

はじめに

長崎県南高来郡南串山町丙1番地に所在する国崎遺跡は、南串山町国崎半島公園整備工事に伴い南串山町教育委員会および長崎県教育庁文化課によって1993年(平成5年)の12月に発掘調査され、その際縄文時代の幼児骨1体が検出された。この遺跡は1986年(昭和61年)と1988年(昭和63年)にも発掘調査¹⁾がなされているが、1988年の調査においては縄文時代中・後期の未成人骨²⁾1体が出土している。

ここで報告しようとする国崎遺跡出土の幼児骨は、全国的にも出土例の少ない縄文時代のものであることから、当時の幼小児の成長、生活環境などを研究する上で貴重な資料になると考えられる。人骨の残存は完全ではないが、四肢骨の計測および観察は可能であったので、その特徴について報告する。

資料・方法

本遺跡(図1)から出土した人骨は1体分で、同遺跡からは1988年に1体出土しているために、本人骨を国崎2号人骨として扱うことにした。残存部は図2に示しているように主として四肢骨が残存している。また、この人骨の所属時代は、別稿で述べられているように考古学的所見から縄文後期末に属す人骨と考えられている。

この人骨の年齢は後記しているとおりの³⁾藤田による現代人の歯の萌出時期を参考に推定を行った。計測はMARTIN-SALLER⁴⁾の方法で行ったが、脛骨の横径についてはVALLOIS⁵⁾方法を用いた。また、幼小児骨の長骨は骨端が分離するために、中央位での計測は、骨端を除く骨体の最大長の中央位で計測を行った。

所 見

1. 形態的特徴

各骨の計測値は表2から6に示し、文末に一括して掲げている。

1) 頭蓋

頭蓋は後世における攪乱のためと思われるが、歯が3本残存するのみで、歯式に示すと次のとおり

*長崎大学医学部 解剖学第二教室

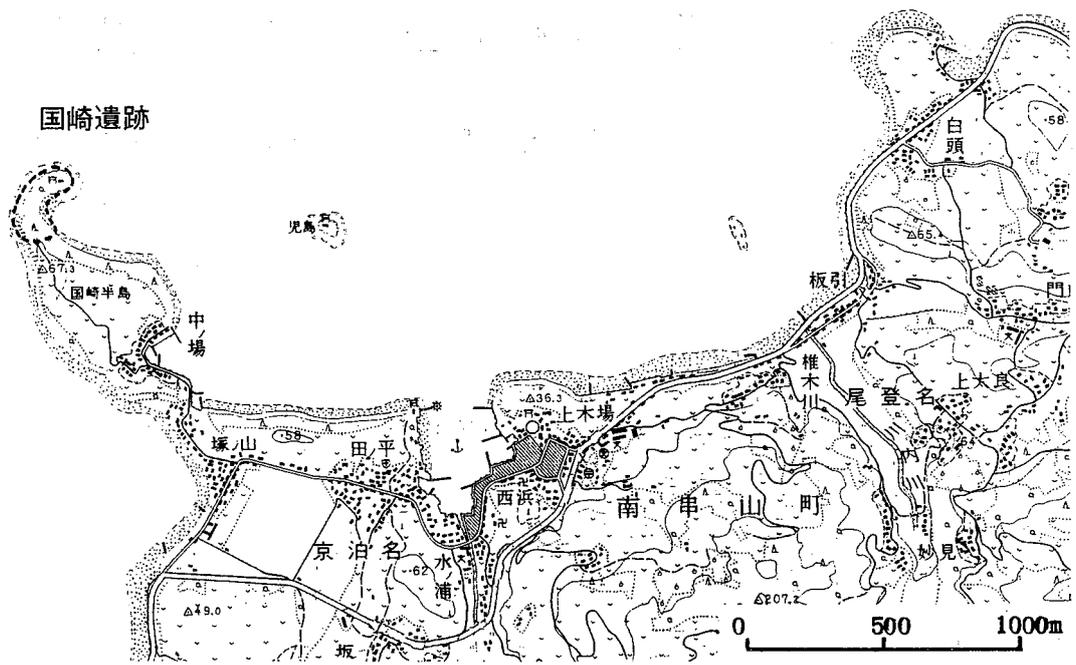


図1 遺跡の位置

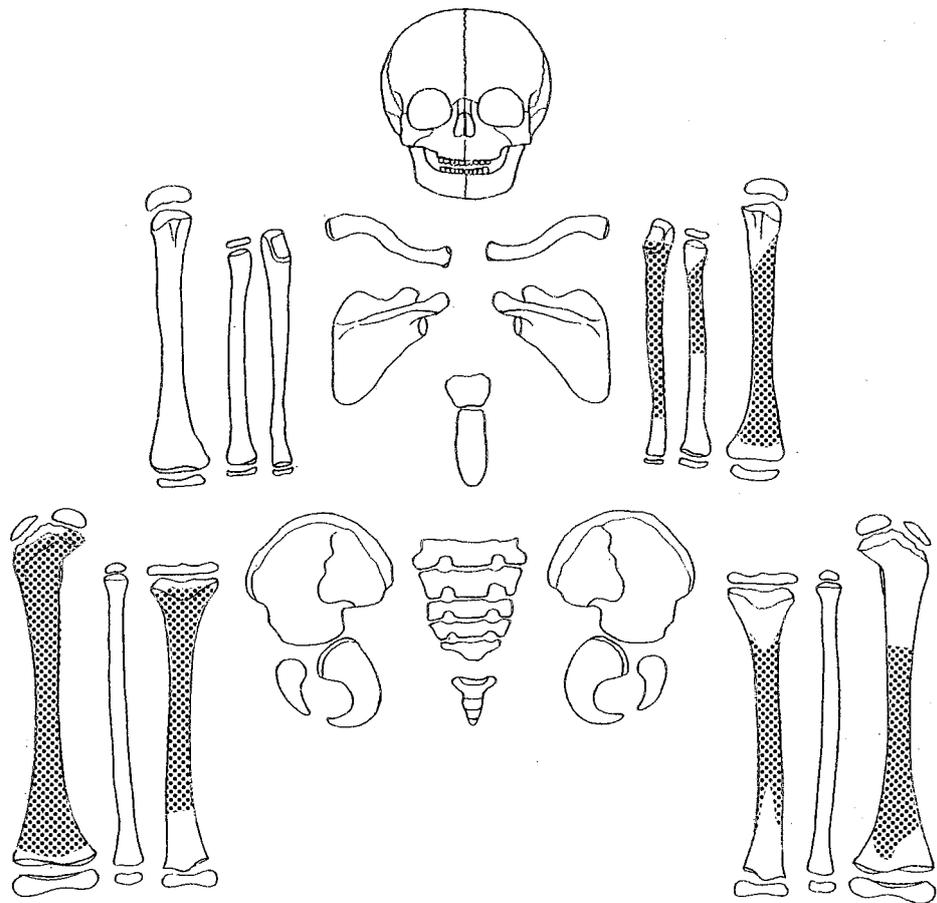
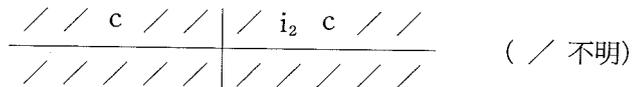


図2 人骨残存部 (アミかけ部)

である。



すべてが上顎の歯で、左側乳側切歯と右・左側乳犬歯である。咬耗の程度はいずれも Broca の 2 度で、萌出後ある程度の期間を経ている。また、歯根も完成している。

2) 四肢骨

(1) 上肢骨

上腕骨、橈骨および尺骨が、左側のみ残存している。

上腕骨骨体の中央周は33.0mm (左)、骨体最小周は32.0mm (左) で、観察によれば骨体は長さに対して細い。骨体の中央最小径と中央最大径との比によって表される骨体断面示数は69.2 (左) となり、示数値は小さくて骨体は非常に扁平である。また、三角筋粗面も観察できる。

左側の橈骨と尺骨は、両骨ともに骨体の遠位部を欠損している。

(2) 下肢骨

左右両側の大腿骨および脛骨が残存している。腓骨は骨体の一部が残っているが、左右は判別できない。

大腿骨は右側が骨体の両端を左側は近位半を欠損しているが、大部分が残っている右側について最大長を推定すると175mm (右) 程度であった。骨体の中央周は38.0mm (右)、39.5mm (左) で、したがって長厚示数の推定値は21.7 (右) となる。示数値が小さく、計測値の上からも骨体が細長い傾向が伺える。骨体の横断面の形状は、大腿四頭筋の起こる粗線が発達して後方への突出が認められる。骨体の中央矢状径と中央横径との比によって表される骨体断面示数は103.3 (右)、101.6 (左) となり、示数値はこの年齢にしてはやや大きい値を示している。これは骨体の断面形がこの年齢期の現代人によく見られる横広ろの楕円形ではなく、後方へ突出していることによる。しかし、上骨体断面示数は85.3 (右) で示数値はやや大きくて、骨体の上部には扁平性は認められない。

脛骨は、右・左側ともに骨体の両端を欠損しているため長さは計測できないが、上腕骨や大腿骨のように細長い印象は受けない。骨体中央位での最大径は13.7mm (右)、横径は11.5mm (右) で、両径の比によって表される中央断面示数は83.9 (右) でやや小さい値を示す。また、栄養孔位断面示数も84.5 (右)、86.7 (左) となり、示数値はやや小さくて、骨体には扁平性が認められる。縄文時代の成人骨の骨体後面にしばしば認められる第四稜は見られない。

3) 軀幹骨

椎骨と肋骨が残っている。椎骨については椎体は残存せず、椎弓部である。肋骨は小片となっているがほとんどは右側のものである。

2. 年齢の推定

この人骨の年齢を乳歯の萌出状態から推定してみると、残存する2種の歯は咬耗の程度から、萌出

後一程度の期間を経ていると考えられる。藤田の日本現代人の萌出時期によれば、両乳歯のうち遅く萌出するのは乳犬歯で男女とも平均1才5ヶ月である。したがって、萌出後の咬耗と歯根形成の程度も考慮すると本人骨は2歳後半から3歳の幼児骨と推測される。さらに四肢骨の長さを弥生時代の幼児骨と比較すると3歳程度と推定する方が妥当であると考えられる。

考 察

国崎2号人骨の四肢骨計測値を、歯の萌出を基準として3歳と推定した長崎県浜郷遺跡出土の弥生時代幼児骨⁶⁾および実年齢3歳の現代人の成績(未発表)と表1において比較することにより、その特徴について検討を試みる。

国崎2号の四肢骨骨体の周径は、上腕骨においては同年齢の現代人とほぼ同様の値であるが、大腿骨および脛骨では現代人よりも大きい値を示している。また、浜郷幼児骨よりは全般的にやや小さい値を示す。長径については、大腿骨の最大長(推定)が浜郷幼児骨とほぼ同じで、実年齢3歳の現代人よりも長い。各骨の長さや骨体の周径は、個体差、年齢のずれなどが予想されるため、数値そのものを直接比較することは避けるべきであるが、最大長と骨体周径との百分率で表される大腿骨の長厚示数は、現代人よりもかなり小さい値を示している。つまり国崎2号の四肢骨の形態は現代人よりも細長い傾向にあり、これは観察所見とも一致している。

骨体の横断面形については、上腕骨と脛骨の断面示数が浜郷幼児骨と同様に現代人よりもかなり小さい値を示し、骨体は扁平である。特に上腕骨においては顕著である。また、大腿骨の断面示数も100を越えて、粗線の後方への突出が伺える。このような骨体の形態的傾向は縄文人などの成人骨に認められ、古い形質と考えられている特徴である。

次いで、現代人3歳の成績を基線として国崎2号と浜郷幼児骨の計測値を偏差折線図(図3)に描いてみると、国崎2号は現代人から大きく振れ、振れの方向も弥生時代の浜郷幼児骨とほぼ一致して

表1 骨体計測値比較(右, mm)

遺跡名 時代 年令	国崎2号 (縄文) (3歳)		浜郷 (弥生) (3歳)		現代人* (近代) (3歳)		
			n	M	n	M	
上腕骨	7.	骨体最小周	32.0(L)	4	34.9(L)	7	31.6
	7(a).	中央周	33.0(L)	4	35.3(L)	7	32.0
	6/5	骨体断面示数	69.2(L)	4	76.5(L)	7	82.4
大腿骨	1.	最大長	《175》	4	175.8(L)	7	149.7
	8.	骨体中央周	38.0	4	40.8	7	35.9
	8/1	長厚示数	《21.7》	4	23.1(L)	7	24.1
	6/7	中央断面示数	103.3	4	92.1	7	93.4
脛骨	10.	骨体周	40.0	4	39.8	7	33.9
	10b.	最小周	38.0	4	38.8	7	33.4
	9/8	中央断面示数	83.9	4	82.6	7	92.8

n: 例数 M: 平均値 * : 実年例, 《 》: 推定値, (L): 左側

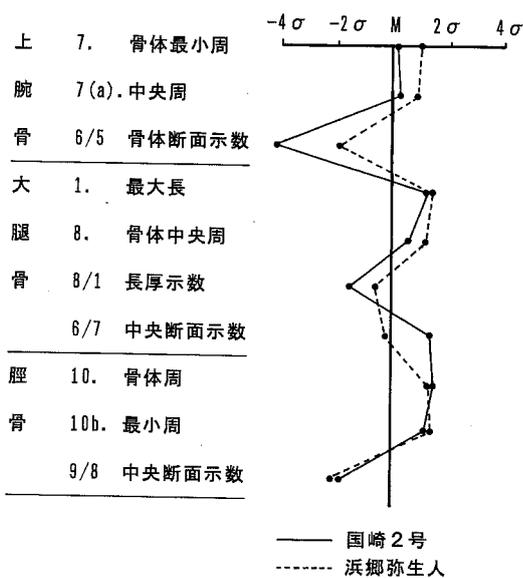


図3 現代人3歳を基準とする偏差折線図

いる。浜郷遺跡から出土している成人骨は、西北九州地域弥生人の⁷⁾主要な部分をなし、これまでの研究から縄文人と類縁関係が強い集団として位置付けられている。筆者は、浜郷遺跡出土の幼小児骨の報告において成人骨に見られる形質の特徴がすでに若年から現われることを指摘しているが、本国崎遺跡出土の幼児骨も低年齢でありながら既に縄文人の形質を獲得しているものと推測される。

要 約

長崎県南高来郡南串山町に所在する国崎遺跡から1993年の発掘調査によって縄文時代後期の人骨が検出された。この幼児骨に関する形質人類学的調査結果は、次のように要約できる。

1. 人骨は1体で、主に四肢骨が残存している。
2. 人骨の年齢は、約3歳の幼児と推定される。
3. 四肢骨は、同年齢の現代人に比べて長さの割に細い傾向を示す。
4. 上腕骨の骨体断面示数は69.2 (左)、脛骨の中央断面示数は83.9 (右)を示し、同年齢の現代人に比べて骨体がかかなり扁平である。また、大腿骨の骨体中央断面示数は103.3 (右)、101.6 (左)を示し、骨体の後方への弱い突出が認められる。

以上、国崎遺跡出土の幼児骨の四肢骨は、縄文人成人骨に認められる形質の特徴を備えているものと考えられる。

<摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた南串山町教育委員会並びに長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。>

参考文献

1. 1989：国崎遺跡。南串山町教育委員会：1—50。
2. 分部哲秋，松下孝幸，佐伯和信，1989：長崎県南串山町国崎遺跡出土の縄文時代人骨。南串山町文化財調査報告書，2：53—60。
3. 藤田恒太郎，1965：歯の話。岩波，東京：57—98。
4. MARTIN-SALLER, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart：429—597。
5. VALLOIS, H. V., 1938：Les methodes de mensuration de la platycnemie; Etude critique. Bull. Soc. Anthropol. 8 ser. 97—108。
6. 分部哲秋，1984：長崎県浜郷遺跡出土の弥生時代幼小児骨 (会)。解剖学雑誌，59：410。
7. 内藤芳篤，1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌，79：236—248。

表2 上腕骨骨体計測値 (mm)

		国崎2号	
		(右)	(左)
1.	上腕骨最大長	-	-
2.	上腕骨全長	-	-
5.	中央最大径	-	12.0
6.	中央最小径	-	8.3
7.	骨体最小周	-	32.0
7(a).	中央周	-	33.0
6/5	骨体断面示数	-	69.2
7/1	長厚示数	-	-

表3 橈骨骨体計測値 (mm)

		国崎2号	
		(右)	(左)
1.	最大長	-	-
2.	機能長	-	-
3.	最小周	-	-
4.	骨体横径	-	8.2
4a.	骨体中央横径	-	8.2
5.	骨体矢状径	-	5.6
5a.	骨体中央矢状径	-	5.6
5(5).	骨体中央周	-	21.5
3/2	長厚示数	-	-
5/4	骨体断面示数	-	68.3
5a/4a	中央断面示数	-	68.3

表4 尺骨骨体計測値 (mm)

		国崎2号	
		(右)	(左)
1.	最大長	-	-
2.	機能長	-	-
3.	最小周	-	-
11.	尺骨矢状径	-	7.3
12.	尺骨横径	-	7.5
S.	中央最小径	-	6.9
L.	中央最大径	-	8.0
C.	中央周	-	23.0
3/2	長厚示数	-	-
11/12	骨体断面示数	-	97.3
S/L	中央断面示数	-	86.3

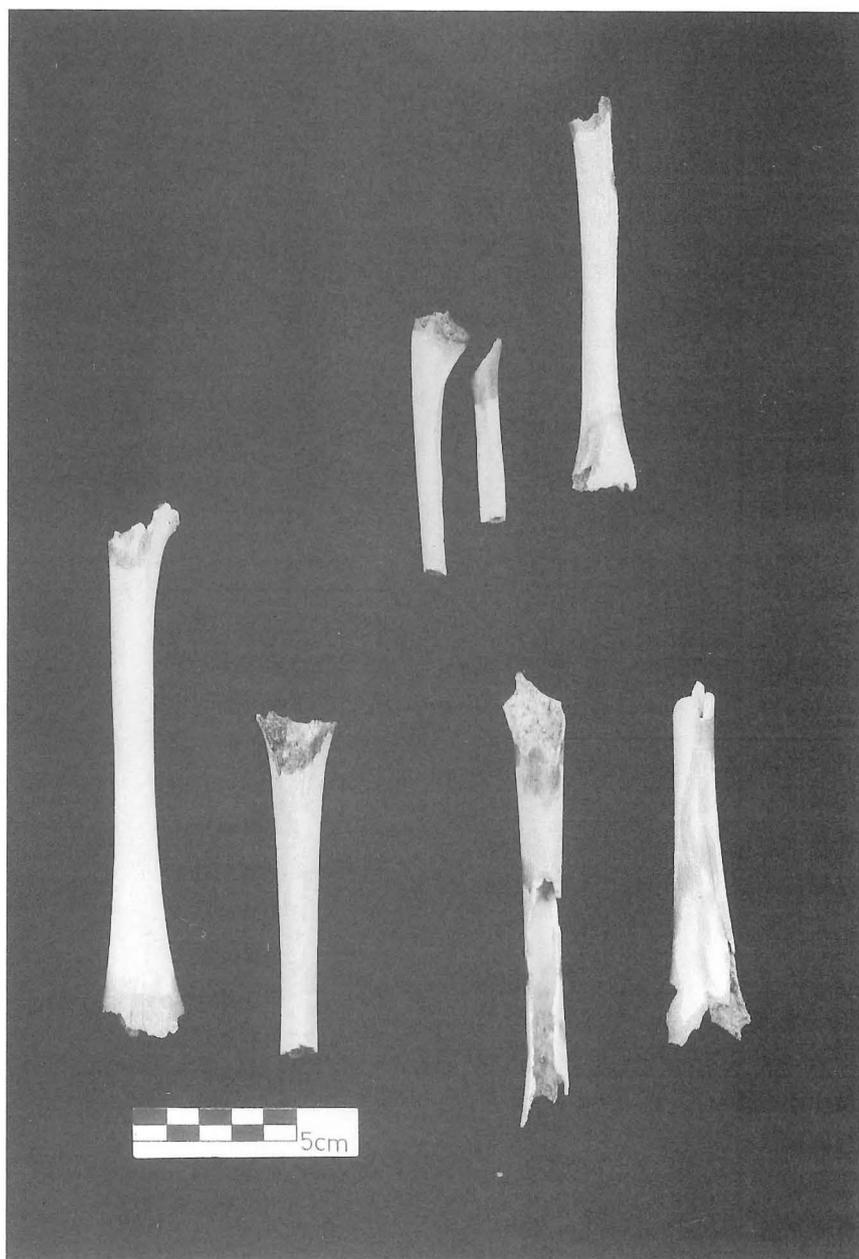
表5 大腿骨骨体計測値 (mm)

		国崎2号	
		(右)	(左)
1.	最大長	《175》	-
2.	自然位全長	-	-
6.	骨体中央矢状径	12.6	12.6
7.	骨体中央横径	12.2	12.4
8.	骨体中央周	38.0	39.5
9.	骨体上横径	14.3	-
10.	骨体上矢状径	12.2	-
8/1	長厚示数	《21.7》	-
6/7	骨体中央断面示数	103.3	101.6
10/9	上骨体断面示数	85.3	-

《 》: 推定値

表6 脛骨骨体計測値 (mm)

		国崎2号	
		(右)	(左)
1.	脛骨全長	-	-
1 a.	脛骨最大長	-	-
6.	最大下端幅	-	-
7.	下端矢状径	-	-
8.	中央最大径	13.7	-
8 a.	栄養孔位最大径	14.8	15.0
9.	中央横径	11.5	-
9 a.	栄養孔位横径	12.5	13.0
10.	骨体周	40.0	-
10a.	栄養孔位周	42.5	44.0
10b.	最小周	38.0	-
9/8	中央断面示数	83.9	-
9a/8a	栄養孔位断面示数	84.5	86.7
10b/1a	長厚示数	-	-



国崎2号人骨，四肢骨（幼児）

南串山町文化財調査報告書第3集

国崎遺跡Ⅱ

1995

発行 長崎県南串山町教育委員会
南高来郡南串山町丙10263番地

印刷 株式会社 昭和堂印刷